日唐戦争

瀧川政次郎

「日唐戦争」という演題を掲げておきましたが、日唐戦争という項目は普通の日本史辞典には出ていません。しかし、日唐戦争なる語は、決して私の新造語ではありません。戦争闌なる昭和十二年十一月に、辻善之助博士と井上一次陸軍中将との監修の下に編纂・刊行されました『大日本戦史』には、陸軍少将竹内栄喜という人が、「日唐戦争」なる題下に、天智天皇二年（西暦六六三）九月に、南朝鮮の錦江の河口白村江において、日本の艦隊と唐の艦隊とが戦闘を交え、日本軍が敗退した「白村江海戦」の経過を述べておられます。その前にも、日唐戦争なる語を用いた人があったかも知れませんが、管見の及ぶ限りにおいては、これが日唐戦争なる語が用いられた最初であります。

但し私がこれより述べようとする「日唐戦争」は、竹内少将のいう日唐戦争とは少し意味が違うのであります。通俗の意味におきましては、戦闘すなわちバッツル（Battle）も、戦役すなわちウォアー（War）も、倶に戦争と呼ばれていますが、軍事学の上では両者は截然と区別せられるべきでありまして、白村江の戦は日唐戦争のピークをなす大戦闘でありますが、日唐戦争そのものではないのであります。今日の国際法におきましては、宣戦の布告より媾和条約の締結に至るまでの両国の関係及び当事国と中立国との関係を規定するものを戦時国際法と呼んでおりますが、過去の戦争におきましては、戦争の開始に必ずしも宣戦の布告を必要としないのでありまして、敵対行為があれば戦争は開始されたとみてよい

のであります。また戦争の終結にも必ずしも媾和条約の調印、批准交換を必要としないのでありまして、両国の和平の意思が公示せられ、捕虜の送還とか、親善使節の派遣とかいう事実があれば、戦争は既に終ったとみてよいのであります。

日唐戦争がいつ始まって何時終ったかはむつかしい問題でありまして、これについては史家の間に異論のあることと思いますが、可成り長期に亘ったものであることは何人によっても肯定せられることでありまして、白村江の戦の経過だけが日唐戦争でないことは、ミッドウェーの戦のみが我等のいう大東亜戦争、アメリカ人がいうところの太平洋戦争でないのと同じであります。大東亜戦争にアメリカ合衆国のみならず、イギリス、オランダ、中華民国等の多くの国々が参戦しておりますように、私のいう日唐戦争にも、高勾麗、百済、新羅の三国が参戦しております。高勾麗、百済は日本の同盟国であり、新羅は唐の同盟国でありました。故に市村鑽次郎博士は、この戦争を日本・高勾麗・百済の三国同盟と唐・新羅二国同盟との間の戦争として捉え、その経過を博士の名著『東洋史統』の中に述べておられます。さすがに市村博士は本格的な歴史家だけあって、その識見は高邁でありまして、東洋史の大局面の上から白村江海戦を含む日唐戦争の東洋史上における意義を闡明されておりますが、博士はなお東洋史の専門家という立場に躊躇して、この戦争が日本の国家に与えた影響、則ち日唐戦争の日本史上における意義というものを充分に説いてはおられないのでありまして、私としてはこれに満足することができないのであります。

結論から先に申しますと、日唐戦争は、隋の文帝の開皇十八年（西暦五九八）、我が推古天皇の六年に始まり、武周の長安元年（西暦七〇一）、我が文武天皇の大宝元年に終ったのでありまして、その間一〇三年を三期に分ち、開皇十八年より唐の高宗の顕慶五年（西暦六六〇）における百済侵略までをその冷戦期、翌斉明七年における日本の百済救援軍の派遣より天智天皇の二年（西暦六六三）の百済の完全滅亡に至る三年間をその熱戦期、その翌天智三年、唐の高宗の麟徳元年（西暦六六四）より武周の長安元年（西暦七〇一）、我が文武天皇の大宝元年、粟田真人が遣唐持節使に任命せられるまでの三十八年間をその対峙期とするものであります。このように日唐戦争が約一世紀の長期に亘って戦われたものとい

たしますと、三国同盟と二国同盟との対抗という市村博士の観察は当りません。私のいう日唐戦争の熱戦期には、新羅は唐の同盟国であり、高勾麗、百済は日本の同盟国でありますが、冷戦期におては、新羅はまだ唐に属しておりませんし、対峙期においては、唐と新羅とは敵対関係に立ち、却って日本の与国となっております。また百済は白村江海戦の直後、百済王豊璋は高勾麗に逃れ、佐平、達率の重臣たちは日本に亡命して姿を消し、高勾麗も泉蓋蘇文の二子男生、男建の争いに乗じて、唐の高宗の総章元年（西暦六六八）、天智天皇の七年に、唐の為めに打ち滅され、三国同盟から脱落してしまっています。故に西暦五五八年の隋・麗戦争の開始より西暦七〇一年の遣唐親善使の任命に至るまでの期間、中国の漢族国家と敵対関係を持続し、媾和によってこの戦争を終結せしめたのは、日本のみであります。この戦争の長い期間に隋は唐と交替しましたが、中国々家の同一性は失われたわけではありませんから、私は簡潔を尚んでこれを日唐戦争と呼ぶことにしているのであります。

大和の朝廷が東北地方を除く日本全土を統一して大八洲国となりましたのは、西暦四世紀の中葉と考定せられる崇神天皇の御代ごろでありますが、内においては大八洲国、外においては倭国と称せられた当時の日本は、氏族国家の聯合より成る国家でありまして、『魏志倭人伝』に、耶馬台国の群小国家の首長が卑弥呼の宗女豊与を擁立したことや、継体天皇が群臣の推戴によって越前の三国より立って皇位を嗣がれたことによっても、その国家の体制が知られます。八百万の神々が天の安河原に神集いにつどい、神謀りにはかり給うたという神話も、氏族聯合国家における政治の実態を反映していると思います。その大八洲国が日本となり、氏族聯合体制が揚棄せられて天皇を元首とする隋唐式の中央集権国家が成立するに至りましたのは、この長期に亘る日唐戦争の結果であります。日本がこの日唐戦争のために、応神天皇、仁徳天皇の御代以来、約二百年に亘って朝鮮半島に扶植した勢力を失い、半島の地が馬韓の一国より興った新羅によって統一せられるに至ったことは、もとより東洋史上における大事件でありますが、日本がこの戦争の刺戟によって天皇を中心とした一君万民の中央集権国家となったことは、それにも劣らない東洋史上の大事件でありまして、これを抜きにしては日本史

は勿論、東洋の古代史を論ずることはできないのであります。

日本は氏族聯合の国家体制から中国的な中央集権国家へと発展してゆく途上において、三つの大きな事件を経験いたしました。その第一は推古朝における聖徳太子による冠位十二階制の制定及び十七条憲法の発布等の諸改革であり、その第二は、中大兄皇子則ち天智天皇と藤原鎌足とによる大化改新における改革であり、第三は、天武天皇による壬申の乱を契機として行われた諸改革であります。普通の日本史の教科書においては、隋唐的な中央集権国家則ち律令国家が、西紀六四五年に断行せられた大化の改新によって出来上ったように説かれていますが、律令国家が完全にでき上ったのは、天武天皇、持統天皇の時代でありまして、律令国家成立の時代は、殆んど此の日唐戦争が行われた時代と一致しているのであります。

凡そ国家というものは、他の国家から侵略の脅威を受けた場合に興るものであります。民族も個人と同じように自衛本能を持っているものでありまして、「兄弟墻に鬩ぐも外その侮りを防ぐ」という諺のあるごとく、氏族若しくは部族は互いに相争っていましても、他種族の国から攻撃せられるか、攻撃されるという脅威を受けるときは、小異を棄てて大同に就き、一致協同して外敵に当るものであります。古代ギリシャのアテネ、スパルタ、コリントといったような都市国家は、長い間互いに相攻伐していましたが、西紀前四八〇年、ペルシャ王クセルクセスが大軍を率いてギリシアに侵寇するに及んで、アテネとスパルタとは同盟してことをテルモピレー及びサラミスに防ぎ、クセルクセス大王を奔らせました。これが大希臘則ちマグナ・ギリシャなるものが成立するに至った原因であることは、みなさま御承知の通りであります。また漠北の地に遊牧していた匈奴は、小部落に分れて相抗争していましたが、中原の地に秦・漢の大帝国が興り屢々討伐を受けるに及んで、冒頓単于によって統一せられて大勢力となるに至りました。

推古天皇十五年、小野妹子が隋に遣われたのは、日本人が中国の絢爛たる文化にあこがれ、これを摂取し、自国に移植せんが為めであったと説かれていますが、そんなことは考えられません。文化の誘惑ぐらいで、日本人は危険な海を渡っ

て中国へ行こうとはしません。中国の文化のすばらしいことは、推古朝に及んで日本人が初めて知ったことではありません。記・紀にこそ記載はなけれ、仁徳天皇以下雄略天皇に至る「倭の五王」が、中国の南朝に遣使朝貢していたことは、『晋書』、『宋書』等の記載によって明かなところでありまして、中国文化のすぐれていることは、推古朝以前から日本人の熟知していたところでありました。遣隋使小野妹子の派遣が単なる文化輸入を目的としたものであったとしたならば、日本は既に倭の五王後代に留学生を中国に送っていた筈であります。

また日本がヨーロッパの文化に接したのは、古く室町末期の南蛮人渡来の時代からでありました、寛永の鎖国令以後においても、長崎の窓を通じてヨーロッパ文化は徐々に日本に伝えられていました。故に日本がヨーロッパ文化にあこがれて開国政策を採ったのであれば、嘉永六年のペルリの来航を待つまでもありません。日本が安政五年、欧米諸外国と通商条約を結ぶに致ったのは、欧米列強の帝国主義によって脅威を感じたからでありまして、ペルリ提督の航海日記には、日本侵略の意図が明かに書かれています。

これから考えても、推古天皇の御代における小野妹子の派遣が、単なる文化輸入の目的でなかったことがわかります。然らば推古朝遣隋使の主要目的は何であったかと申しますと、一つには遣使朝貢ということによって文帝の御嬉嫌を取り結んで、日本征服の意図を解消せしめること、二つには隋の日本侵寇に備えてその軍事力を偵察することであったと思います。幕末に日本に押しかけて来たイギリスは、既に一八四〇年、阿片戦争を起して中国の一角に侵略の橋頭堡を築いています。それと同じように、隋は崇峻天皇の二年（西暦五八九）、南朝の陳を滅して中国を統一し、その余威に乗じて推古天皇の六年（西暦五九八）、高勾麗を討っています。小野妹子が派遣せられた推古天皇十五年は、隋の大業三年（西暦六〇七）でありまして、隋が三十万の大軍を発して高勾麗を再征した大業八年（西暦六一二）の五年前であります。高勾麗は、開皇十八年に隋に攻伐を被る以前から、隋の侵略を恐れ、腹背から敵を受けてはかないませんから、従来の仇敵の関係を打ち捨てて、日本に親善の使節を送って来ています。高勾麗が隋のために滅されれば、隋の軍勢が半島を席捲して

しまうことは、火を睹るより明かであります。そうなれば日本が半島の上に築いた折角の権益が台無しになってしまうのみならず、日本の本土までが危くなって参ります。故に聖徳太子、蘇我馬子も、旧怨を忘れて高勾麗のさし延べた手を温かく握られたのでありまして、これは非常に賢明な処置であったと云ってよいと思います。故に高勾麗と共同して隋の東方侵略を防ぐという我が対外々交方針は、妹子遣使の前から既に決定されていたのであります。隋が既に宣戦している高勾麗と親善関係を結ぶということは、隋に対する敵対行為であります。高勾麗は日本と親善関係を結ぶことによって、南面国境の守備兵を北面国境に廻して隋に対する防禦力を強化することができました。故に私は高勾麗と日本とが共同して隋の東方侵略を阻止しようとした時を以て、日唐戦争の始めとするのであります。推古天皇十五年の遣使は、既に隋を敵性国と見ての遣使でありますから、仏教を学ぶという仮面をかぶっていますが、その実は敵情偵察という使命を持っていた使であったのであります。

聖徳太子は、遠夷の慕化朝貢遣使ということによって中国帝王の虚栄心を満足せしめるだけのことで、日本が隋からの攻撃を避け得られるとは考えておられません。高勾麗と手を握れば、いづれの日にか隋と戦う日のあることを覚悟しなければなりません。太子はこの決意を定め、日本国家の安全を祈願する為めに、妹子発遣の直前である十五年二月十五日、大臣蘇我馬子と共に百寮を率いて神祇を祀り拝しておられます。佐伯有義氏は、推古紀、十五年二月戊子条に

朕聞之。曩者我皇祖天皇等宰レ世也。跼天蹐地。敦レ礼二神祇一。周祀二山川一。幽通二乾坤一。是以陰陽開和。造化共調。今当二朕世一。祭二祀神祇一。豈有レ怠乎。故群臣共為竭レ心。宜レ拝二神祇一。

とある文を挙げて、「皇太子及び蘇我馬子等、崇仏にのみ心を傾けて、建国以来の国風たる敬神の道を忽諸にし給ひしより、特に此詔を下し給ひしなるべし」といっているが、是れ神道家の我田引水的な解釈であります。日唐戦争の開始期に当って此の詔のあることは、安政五年四月、孝明天皇が外夷の頻りに我が国を窺うを憂いて天下の名神大社に遣使奉幣せられたのと同様に解さねばならないと思うのであります。そこに隋禍を厭攘するためであることが明記されていないの

は、『日本書紀』が唐人に読ませることを目的として編纂せられた史書なるが故であります。

聖徳太子は、中国が天下国家であって、自国と対等の国家あることを承認せず、朝貢の形式を採らなければ、外国の国書を受付けないことをよく承知しておられました。それにも拘らず、「日出ル処ノ天子、日没スル処ノ天子ニ書ヲ致ス」云々の対等の文辞を用いた国書を齎らしめられたのは、明かに隋に対する敵意でありました、煬帝がこれを覧て沢ばず、「蛮夷ノ書無礼ナルモノ有リ。再ビ奏スルコト勿レ」と言ったのは尤もであります。そう言いながらも煬帝がこれを受取り、妹子の一行を追い返さなかったのは、太子外交の非常な成功であったといわねばなりません。『隋書倭国伝』には

大業三年、其王多利思北孤遣使朝貢。使者曰。聞海西菩薩天子。重二興仏法一。故遣朝拝。兼沙門数十人。来学二仏法一。

とありますが、煬帝は妹子から「菩薩天子」と呼ばれたことが余程嬉しかったのでありましょう。また煬帝は将に高勾麗を討たんとして軍備を整えている時でありましたから、遠好近攻という中国の伝統的政策の上からも、妹子の一行を追い返すことをしなかったのでありましょう。しかし、私はこの推古朝の日隋外交を見ていると、隋の煬帝は聖徳太子に翻弄されているという感じがするのでありまして、聖徳太子という人は偉大なる思想家であると共に、優れた外交家であったと思うのであります。

日本と高勾麗との提携が何時成ったか、その時期はハッキリ致しません。しかし、高勾麗が太子が内典の師とされた慧慈法師、外典の師とされた博士覚哿、及び曇徴、法定、恵灌といったような英才を日本に送り込んでいることは、高勾麗が日本と接近せんとして如何に努力したかを語っています。推古紀、十三年四月条には、高勾麗の大興王が摂津の四天王寺、飛鳥の法興寺等の仏像を造る材料として、黄金三百両を贈って来たことが見えていますが、この頃には日・麗の提携は或る程度できていたに相違ありません。大業九年の隋の高勾麗征討は、散々な隋の失敗に終りました。隋の煬帝はこの敗戦のために鼎の軽重を問われ、終にその社稷を失うたのであります。高勾麗はこの戦争の直後、日本に対して隋人の捕虜と隋軍から分捕っためづらしい兵器とを献上してきました。推古紀、廿六年八月癸酉朔条には

高麗遣レ使貢二方物一。因以言。隋煬帝興二卅万衆一攻レ我。返之為レ我所レ破。故貢二献俘虜貞公普通二人。及鼓吹弩抛石之類十物。并土物駱駝一疋一。

とあります。この与国高勾麗の捷報は、日本人を喜ばせたことでありましょう。日本人は眇たる小国高勾麗が超大国隋の帝王煬帝が親ら二百万と号する大軍を率いて遼東に繰り出してきた隋軍を撃破したその勇気を褒め称えると共に、傲慢なる煬帝を対等の文辞を用いた国書を以て軽くあしらい、高勾麗と結ばれた聖徳太子の識見の高邁なることに感嘆の声を発したことでありましょう。国民の心は、この挙によって高勾麗と深く結ばれ、日麗両国の関係は攻守同盟にまで深められたと思います。聖武天皇の御代、渤海の大武芸は、高勾麗の後身と称して日本に親交を求め、日本またこれを喜んで受け容れ、爾後醍醐天皇の御代に至るまで、日渤の親交は続きました。平安時代の物語にコマビトとあるのは渤海国人のことでありまして、奈良・平安の日本人は、渤海人を曽っての締盟国高勾麗の遺孽として、これを厚遇したのであります。この後世の史実から推しても、日唐戦争の三期を通じて、日本と高勾麗との結びつきの深かったことが察せられます。

然るに爰に不思議なことがあります。それは高勾麗が唐のために滅ぼされた総章元年の翌々年である唐の高宗の咸亨元年（西暦六七〇）に、日本が高勾麗の平げられたことをお祝いする使を唐に送ったという記事が、『新唐書』の日本伝にあることであります。高宗の時代は、私のいう日唐戦争の第三期でありまして、日唐の間には媾和条約はまだ締結されておりません。高宗の咸亨元年は、我が天智天皇の九年でありまして、この年には天智天皇は唐の侵寇に備えて大和、河内の国境に築かれた高安城（戦国時代に松永弾正久秀の築いた志貴山城）に穀と塩とを積ましめ、また長門に城一つ、筑紫に城二つを築いて、唐に対する防備を更に強化せしめておられます。『善隣国宝記』、『異称日本伝』、『馭戎慨言』を初め、市村鑽次郎、黒板勝美の諸先生も、この『新唐書、日本伝』の記事を信じ、天智紀、八年是歳条に「小錦中河内直鯨等ヲ遣シテ大唐ニ使セシム」とあるのは、高勾麗の平いだことを賀す使であることとしておられます。しかし、私はこの高勾麗の平いだことを賀す使は、唐将劉仁軌が白村江の戦で獲た日本人の捕虜をその使に仕立てて、唐の天子を喜ばせた

ものであると考えているのでありまして、天智天皇がそのような使を唐に送られたことは絶対にないと思います。もちろん外交というものは一筋縄ではいかんもので、和戦両方に備えて、片手で円を画き、片手で方を画くといったようなこともしなければなりませんが、日本人は昨日まで同盟国として共に唐国と戦った高勾麗が、敵国唐に滅ぼされたのを賀す使を唐に派遣するような卑窟な、軽薄な国民ではありません。『新唐書』巻一百八の劉仁軌伝には、仁軌が朝鮮から凱旋して唐に還りました麟徳二年の翌年である乾封元年（西暦六六六）正月、唐の高宗が群臣を率いて泰山で封禅の儀式を行った際、仁軌が新羅、百済、但羅（国史にいう耽羅、則ち済州島）、倭四国の酋長を率いてその儀に赴き会したので、高宗の御感にあづかり、擢んでて大司憲の官を授けられたことが見えています。劉仁軌はこれに味を占めて、咸亨元年（西暦六七〇）には配下の日本人捕虜を日本国の使節に仕立て、高勾麗の平いたことを賀せしめたに相違ありません。

中国の史書は、『唐書』に限らず、『三国志』にしても『北史』にしても、みな中華思想によって書かれているのでありますから、そこに書かれていることを悉く史実として信じてはなりません。『魏志』の倭人伝に描写されている倭人の風俗は、日本人を蛮夷として蔑視せんが為めに、故らに辺疆の漁民の風俗を写したものでありまして、これを以て三世紀における日本の文化とするのは、ロンドンのスラム街の情景を描いたものを以て二十世紀のイギリスの文化とするようなものであります。戦後の日本史家には、『古事記』、『日本書紀』の記事はトコトン疑ってみるが、『魏志倭人伝』の記事はこれを盲信するという誤った傾向がありますので、特にこの事を注意しておきます。

隋と戦を交えることがあるかも知れぬという覚悟をきめられた聖徳太子は、隋と戦って日本が負けないようにするには何うすればよいかということを真剣に考えられました。その結果できたものが、太子の『十七条憲法』であります。日本が強大なる中国々家に対して不敗の体制を整えるには、国民が和衷協同して挙国一致の体制をとる外ありません。『孫子』の兵法にも「地ノ利モ人ノ和ニ如カズ」とあります。故に太子は北斉の蘇綽の『六条詔書』を範として『十七条憲法』を作られたのであります。北斉においても魏（拓抜魏）国が東魏と西魏とに分れて抗争した後を受けて、群臣の間に

対立が多く、それが国の悩みでありましたから、『六条詔書』には「和」が強調されています。当時の日本におきましても、氏族聯合の国家体制は、その弱点を露呈し、氏族間のみならず、皇族間においても、血で血を洗う骨肉間の争いが起り、皇室の本宗は武烈天皇に至って断絶するというような悲運に際会しています。欽明天皇の御代に任那の日本府が覆滅したのも、国宰と将軍との不和がその最大の原因であります。また太子は十六歳のときに、群臣が蘇我馬子を領袖とする崇仏派と物部守屋を領袖とする排仏派との二大党派に分裂、抗争して、血杵を流すの惨状を呈したことを身を以て体験しておられます。このような状態で日本が隋と戦えば、日本が亡んでしまうことは明らかであります。故に太子は、憲法の首章に「和ヲ以テ貴シト為シ、忤ルコト無キヲ宗ト為セヨ」と書かれたのでありまして、これは太子の血の叫びであると思います。

維新の志士は、欧米列強の侵略を防ぐには、欧米のすぐれた科学を早く採り入れて、大砲、軍艦、小銃等の優秀な武器を日本で製造し、西洋諸国の徴兵制度や軍隊の教練法を学んで、強力なる陸海軍を持たなければならないと考えましたが、推古朝の知識人が考えたことも、これと同じであります。隋唐に打ち勝つためには、数万人の兵士を直ちに動員できるような国家機構を造らねばなりません。それには籍帳の制度も必要であれば、租庸調、班田の制も必要でありますが、まず国民を総動員し得る強大な権力をもつ中央集権的統一政府を造らねばなりません。中国においては、その中央集権的統一政府の首班は皇帝でありますが、日本においては、さしづめスメラミコト則ち天皇をそこへ持ってゆく外ありません。故に太子憲法には、「民ニ両主無ク、率土ノ兆民ハ、王ヲ以テ主ト為ス」とか、「詔ヲ承レバ必ズ謹メ」という中国の統一国家の根本理念が謳われていますが、その王というのは天皇であり、詔というのは天皇のミコトノリであります。訴訟を明弁せよとか、賞罰を明かにせよとか、民を使うに時を以てせよとかいうのは、中央集権的統一政府が樹立せられ、現在の臣連伴造が天皇の官僚となったときの官僚の心得であります。氏族聯合体制の国家をいますぐ中央集権的国家に改造することはできませんから、太子は中央集権国家を創造する基礎理念と、中央集権国家の官僚として民政の局に当

る者の心術とを当時の臣連伴造に示されたのでありまして、『十七条憲法』は当時の時勢に則した極めて実際的な法律であるといってよいのであります。

世には『十七条憲法』は、官吏に対する道義的訓戒であって、法律というに値しないとか、『十七条憲法』には、統一政権思想が現われているから、統一政権が確立せられた大化改新以後に何人かがこれを偽作して、太子に附会したものであるとか、蘇我氏を抑えて天皇の権力を絶対化したものであるから、太子は馬子の怒りを懼れてこれを上宮王家に秘しかくして置いたものであろうとかいった説がありますが、いずれも日唐戦争の危機感というものを考慮に入れていない辟説であります。蘇我馬子もこの憲法の公布には賛成であったと思います。上宮王家と蘇我の宗家とは後に相反目して、蘇我入鹿が山背大兄王一族を殺すという悲惨事を見るに至りましたが、その反目を馬子と太子との関係にまで溯らせて考えるのは、理由のないことであります。また太子憲法には道義的訓戒が述べられているから、それは法ではないというのは、現代法の法観念を以て古代法を見た愚論でありまして、道徳的規範と法律的規範とが截然と分化していないのが、古代法の特色であります。弘仁格式の序に

暨二乎推古天皇十二年一。上宮太子親作二憲法十七条一。国家制法自レ茲始焉。

とあることは、当代の人々が太子憲法を法として観念していたことを語る何よりの証拠でありまして、現代法のような法でなければ法といえないというならば、明治以前の日本には全く法はなかったということになります。太子憲法には、律令法典の根本理念が述べられているのでありますから、それは正しく憲法と呼ぶにふさわしいものといってよいでありましょう。十七条憲法が後人の偽作であるというのは、『古事記』、『日本書紀』は、虚構の事実を記載したものであるという予断を懐いて『古事記』、『日本書紀』を見た津田左右吉氏の説であります。凡そ革命は革命的思想先ず起って然る後に起るものであって、革命の事実が先ず起つて後に革命思想が演述されるといったようなことは考えられません。津田左右吉氏は史籍に通じていた人かも知れませんが、国家学や法律学の知識は殆ど零に等しく、国家学、法学の常識をも備

えていません。戦後、津田氏の学説を奉ずる若い学者が多く現われて、戦前の超国家主義者の日本史とは逆に、日本の国家、日本の文化、日本の皇室を糞ミソに言いさえすれば、それが正しい歴史であるかの如く考えていることは、私の最も遺憾とするところであります。

聖徳太子は、日本の国家を隋唐のような中央集権国家に改造し、強大な戦力をもつ国家に日本を育成してゆくためには、隋の制度、特にその軍事制度や、すぐれたる武器製造の技術、巧妙なる戦術、傷病兵に対する医療法や医事制度などを早急に学ばねばならないと考えて、小野妹子に若干名の留学生を随行せしめられました。この留学生派遣の目的は、いわば敵の武器、兵法を学び取って、敵の攻撃を防ごうというのでありますから、これをあらわに言うことはできません。そこで太子は仏教を学ぶを以て名とせられたのでありますが、中華思想でかたまっている隋の煬帝は、それがカモフラージであることに事実気がつかなかったようであります。煬帝が日本を蛮夷の国として如何に軽蔑していたかは、文林郎裴世清を妹子に随行せしめて日本に遣わしたことによっても推察されます。文林郎は従九品の散官でありまして、最下級の官品であります。

遣隋留学生の錚々たるものは、孝徳天皇の御代に国博士に任ぜられて、大化新政府の顧問となった僧旻と高向玄理、大織冠鎌足の師となった南淵請安、その子孫難波薬師の姓を賜った医師の恵日の四人でありましょう。僧旻は法師でありますが、後の江戸幕府における天海、崇伝といったような人でありまして、遣隋留学生、留学僧の中からは、日本の宗教界をリードした高徳の名僧は出ていません。遣隋留学生が仏教を学びに行ったものでないことは明かであります。恵日は医を世業とした者でありまして、隋へ医学、医術を学びに遣わされた者であろうと思います。幕末に日本人が西洋から最初に学んだものも、医学と砲術とでありました。遣隋留学生の中には、その名こそ聞えませんが、専ら兵学を学んだ者もいたと思います。聖武天皇の御代に唐に留学した吉備真備は、五経を学びに行ったものですが、兵学を兼習して帰り、大軍師になっています。恵日は医学を学びに行った者ですが、律令の学をも兼習したものと見えまして、推古天皇卅一年、帰

朝すると同時に、朝廷に対して

其大唐国者。法式備定珍国也。常須レ達。

と献言しております。

日本が留学生を中国に送って来る目的が、仏教を学ぶにあらずして、国家の制度、兵学等を学び取らんとするものである、これは油断がならないと、気づいたのは唐の太宗であったと思います。唐の太宗は、貞観十九年（西暦六四五）に高勾麗を親征し、大敗して長安に逃げ戻っていますが、そのとき日本の態度がどうもおかしいと気がついたらしいです。唐人に読ますことを目的とした『日本書紀』には、日本が唐の太宗の高勾麗征討の際に、密々高勾麗を援助したことは、おくびにも出していませんが、国と国との間もやはりギブ・アンド・テークでありまして、高勾麗だけが日本に物を貢し、日本は高勾麗に何物も与えなかったとは考えられません。その頃の国際法には、戦時禁制品の規定はありませんから、日本は高勾麗の要求する軍需品を頒賜の物としてドシドシ高勾麗に送っていたと思います。

日本の態度に疑を持った太宗は、日本の使が唐に来ることを歓迎しないという意思を婉曲に表明しました。『新唐書・日本伝』には

太宗貞観五年。遣二使者一入朝。帝矜二其遠一。詔二有司一毋レ拘二歳貢一。

とあります。即ち太宗は「お前の国は遠いのであるから、そう何年に一度というようにキチンと極めて来なくともよい」と鴻臚卿をして日本の使に言わしめているのであります。貞観五年（西暦六三一）は我が舒明天皇の三年でありますが、『日本書紀』に拠れば、翌四年十月、太宗の使高表仁は、遣唐使犬上御田耜を送って、難波津に来ております。高表仁は新州刺史とありますから、五品以上の官吏であります。日本を怪しいと見た太宗は、このしっかりした官吏を派遣して、日本の国情を偵察せしめたのであります。ところが爰に端なくも大事件が起りました。高表仁は、日本は唐の藩国であるから、日本の天皇は太宗の璽書を三跪九叩の礼を以て受けよと言つて聴きません。我が国の接待員は、表仁の心を和らげ

んとして、生田神社や住道の神社で醸した神酒を表仁に飲ませましたが、表仁は自分の要求が通らねば、此処から帰国すると言い出しました。売り言葉、買い言葉で、「そんなら帰れ」ということになりまして、高表仁は太宗の璽書を我が朝廷に啓せずに、難波から帰国してしまいました。大国唐の使が東夷の国から追い返されたということは、唐人にとっては書くに忍びない大屈辱であります。故に『新唐書』には、この事件が次のように書かれています。

遣二新州刺史高表仁一往諭。与レ王争レ礼不レ平。不レ肯レ宣二天子之命一而還。

舒明天皇が聖徳太子によって打ち立てられた対隋対等外交の方針を堅持し、太宗の使を難波から追い返された胆力は、驚嘆の外はありません。当時中国の周辺に国するもので、これほどの強い処置を執り得た国はどこにも無いのでありまして、この事件は「日出ル処ノ天子、日没スル天子ニ書ヲ致ス云々」の国書を煬帝にぶっつけたこと以上に、日本人の気魄を示す話として、喧伝せらるべきだと思います。

然るに『日本書紀』には、高表仁と日本側との間に、太宗の璽書を受取る儀礼について論争があったことが隠されているのであります。舒明紀、四年十月甲寅条には、餝り船卅二艘に鼓吹、旗幟を備えて高表仁を難波の江口に迎えたこと、難波吉士小槻らが接待員となって表仁を難波の鴻臚館に招じ入れたことは記されていますが、表仁が入朝したことは記されていません。そうして五年正月甲辰条には、高表仁が帰国したことが記されているのであります。『日本書紀』がこのように高表仁来朝の記事を曲げているのは、唐人が『日本書紀』を読んだときに、不快の感情を起すことを懼れたからであることは、申すまでもありません。この種の省筆、歪曲は、『日本書紀』にはまゝあることでありまして、倭の五王の南朝入貢のことが『日本書紀』に見えないのも、それが日本の対唐対等外交に支障を来たすと考えられたからであります。戦後史家の『日本書紀』を批判する人々が、天皇家の記事については、偽作だとか、虚構であるとかよく言うが、渉外記事については、殆どそれを言わないのは、奇怪千万といわねばならないではありませんか。

古代東洋の大局を支配したものは、中国すなわち漢族国家であります。日本列島における大八洲国の成立が、西暦前一

○四年の前漢武帝の遼東経略が画いた一波紋でありますと同じく、大化改新による律令国家の成立も、これを巨視的に見るときは、西暦五八九年、北朝から起った隋が南朝の陳を滅して、後漢以来三百年に亘って分裂していた中国を統一した中国の一大変革の余波であります。近世においては、コロンブスのアメリカ大陸発見によって世界は一となり、東洋の大局を支配するものが中国ではなくして、ヨーロッパに列立する白人の諸国家となりました。西暦一二四二年（後嵯峨天皇の仁治三年）、成吉思汗の孫拔都汗がポーランド及びドイツの聯合騎士軍をワールスタットに破った時代のヨーロッパ諸国は、実に意気地のない弱小国の寄り集りでありましたが、ヨーロッパの白人国家は、その後宗教改革、文芸復興、産業革命の三大改革を経て強大となり、過剰生産物を東洋に売り捌かんとして東洋に進出してきたことが端緒となって、植民地獲得競争の帝国主義となり、終に日本の鎖国の夢を破るに至りました。白人の東漸なくんば、明治維新の改革が起らなかったであろうように、隋の中国統一なくんば、大化の改新は起り得なかったでありましょう。日本が応神天皇、仁徳天皇の御代以来、二百年に逮んで半島に勢力を振い得たのも、漢族国家の勢力が分裂によって後退していたからでありまして、楽浪、真蕃、臨屯、玄菟の四郡の地が漢族国家によってしっかりと押えられていたならば、神功皇后の咒力いかに灼然たりといえども、日本は半島に進出することはできなかったでありましょう。

故に隋が中国を統一し、四郡の地の回復を叫んで高勾麗の討滅を謀るに及んでは、その余波は日本の国内に変動を起さずにはおきません。隋の中国統一は、秦の始皇の中国統一に対比せられるべき東洋史上の大事件でありまして、中国の周辺に住む諸民族は、これによって大きな変動を受けました。この東洋の変局に際会して、日本民族の進むべき方向を決定せられたのが、不世出の英才聖徳太子でありまして、太子の日本史上に占められる地位は、周公が中国史上に占める地位に比すべきであろうと思います。大化の改新は、中大兄皇子と藤原鎌足との協力によって達成せられたものでありますが、その布石は既に聖徳太子によって置かれているのでありまして、推古天皇の御代は、東洋史の局面に大変動が起った時代として、孝徳天皇の御代よりも更に重視せられるべき、日本史上の一時期であると愚考いたします。

日唐戦争（瀧川）

日唐戦争（瀧川）

隋の高勾麗討滅戦は、開皇十八年（西暦五九八）、大業九年（西暦六一三）の二回に亘って行われましたが、いずれも失敗に終りました。唐の太宗は、隋末に蜂起した群雄を討滅して、唐朝三百年の基礎を定めたその余威に乗じて、貞観十九年（西暦六四五）、「遼東ハ本中国ノ地ナリ。隋氏四タビ出師シテ得ル能ハズ。朕今東征シテ中国ノ為メニ子弟ノ讎ヲ報ジ、高麗君父ノ恥ヲ雪ガント欲ス」と叫んで高勾麗を親征しましたが、安市城を囲んで冬将軍の出現に逢い、放々の態で中国に引き揚げ、再征の志を遂げずして、貞観二十四年（西暦六五〇）に崩じました。もう斯うなれば、唐・麗戦争は、失地回復、中国の領土拡張の問題にあらずして、中国の面子の問題であります。太宗の後を嗣いだ高宗にしてみれば、高勾麗は倶に天を戴かざる父の仇であります。高宗がどんな無理をしても高勾麗を攻め滅さねばならないと考えたのは無理からぬことであります。高宗は太宗の棺前に即位して以来、連年兵を遼東に出して高勾麗の都平壌を攻撃させましたが、新城（撫順）の守り堅くしてどうしても平壌に肉迫できません。そこで高宗は百済を急襲してその地を占領し、背面より平壌を攻撃する策に出たのであります。これは第一次世界大戦に当りまして、ドイツのカイゼル・ウキリアム二世がベタンの要塞の堅い壁を避けてベルジュームの中立を侵し、フランス領に侵入したのと同じでありまして、国際信義を無視した暴挙であります。百済が侵されたとなると、日本も黙ってはおられません。斉明天皇は、百済の恩率福信の乞いによって、百済救援軍を半島に送り、唐軍と戦うことになりました。かくして日唐戦争は第一期の冷戦期から第二期の熱戦期に突入するに至ったのであります。

百済を占領した唐は、背面から平壌を攻撃しましたが、高勾麗人は善く防戦しましたので、唐軍は容易に平壌を抜くことができませんでした。ところが爰に高勾麗にとって不幸なことが起りました。というのは高勾麗の実権を握っていた権臣泉蓋蘇文（蓋金）が、西紀六六四年に殂落し、その子男生、男建の二子が仲違いをして、男生が唐に降りました。平壌の攻撃軍に男生の手勢が加ったのでに堪りません。さすがの高勾麗も、西紀六六八年、天智天皇の七年に平壌を抜かれて滅亡してしまいました。後漢の末、高勾麗が漢の玄菟郡の地である鴨緑江の中流丸都に国を建ててより約八百年、隋の文

帝の攻撃をはね返してから七〇年であります。高勾麗が前後七〇年の長きに亘って、漢族国家の攻撃に堪えたということは、実に驚嘆に値することでありまして、日本はこの頑強なる高勾麗人の抵抗があったればこそ、漢族国家の侵略の魔手から免れてその独立を全うすることができたのであります。

しかし、この七〇年に亘る隋唐の高勾麗攻撃は、日本に大きな脅威を与え続けたのでありまして、聖徳太子の律令国家建設の布石が順調に芽を吹いて、大化の改新が実現するに至りましたのは、この脅威による刺戟に因るものでありまして、大化改新の最大の原因は、比処に求められなければなりません。隋唐の高勾麗攻撃は、東洋史の上では隋の煬帝の高勾麗征伐、唐の太宗の高勾麗征伐という風に呼ばれていますが、それは結果から見て、そういう名がつけられているのでありまして、その当時においては、それは漢族国家がその勢力を東方に伸張せんとした動きでありまして、隋唐国家の意図は遼東のみならず、半島を席捲して日本までもその版図に入れようとしたものであります。それは丁度文禄・慶長の役が、最初に意図せられた「から入り」則ち明国征服の目的を達し得ずして、朝鮮を征伐したに止まった為めに、普通に豊臣秀吉の朝鮮征伐と呼ばれているのと同じであります。故に推古時代の日本人にとりましては、隋麗戦争は今日の歴史家が考えているような対岸の火災ではなかったのでありまして、推古天皇廿六年、高勾麗が隋の捕虜を献じ、隋麗戦争の捷報を齎して来たときには、やれやれと安堵の胸を撫で下したに相違ないのであります。高勾麗を滅した唐が、次に唐の高勾麗征伐の協力者であった新羅を滅してその地を併せんとしたことは、新羅名臣金庾信の夙に観破したところでありまして、日唐戦争の第三期に新羅が唐から離れて唐の敵国である日本に味方するようになったのは、実にその故であります。また唐が日本に対して禍心を懐いていたことは、『三国史記』巻七、新羅文武王紀に

又通二消息一云。国家（唐）修二理舩艘一。外託レ征二代倭国一。其実欲レ打二新羅一云々。

とあることによって明証せられます。

坂本太郎博士が、その名著『大化改新の研究』において、改新の原因として大陸文化の影響を採り上げられたことは会

心の至りであります。しかし、その説く所が、大陸文化が改新思想の形成に影響したことをいうのみで、その改新思想を生ぜしめる原因となった隋・唐国家の武力的圧力による危機感に及んでいないことは、私の甚だ物足りなく思うところであります。大化の改新、律令体制の成立に関する研究は、戦後頗る盛んでありまして、井上光貞氏の『日本古代国家の研究』、上田正昭氏の『日本古代国家成立史の研究』を初めとして、新人の手に成る大化改新、壬申の乱、律令官人機構等の研究が発表されていますが、いずれも国内の史料によって律令体制が成立し、整備されてゆく過程を叙述するのみで、その成立、整備の原動力となったものが、隋唐国家が東方に勢力を伸張してゆく圧力によるものであることを述べたものは、ひとつとして存在しません。

是れ何によって然るか。一言にしてこれを言えば、それらの論著がいずれも東洋史、西洋史、日本史と分野を分たれた日本史の専門家によって書かれた論著なるが故であります。日本史の研究において、日本の史料を第一に重んじ、これを研究し吟味しなければならないことは言うまでもありませんが、日本も東洋の一国、世界の一国であるということを忘れてはなりません。航海術の幼稚であった古代においては、大陸よりの影響は緩漫であり、稀薄でありますが、文化が高きより低きに流れるという原則には渝りがありません。また「隴を得て蜀を望む」という諺がある如く、人間の征服慾には限界がないのでありますから、地博物大を誇る漢族国家も、遼東の山地に国をなしている高勾麗を攻め滅したり、流沙を渡って西域のオアシス国家を斬り従えたりいたします。半島の諸民族よりも一足先に統一の業を成し遂げた日本も、夙く「辛卯ノ年（西紀三九一）ヲ以テ来ツテ海ヲ渡リ、百残（百済）・□□（加羅）・新羅ヲ破リ、以テ臣民ト為シ」、爾来二百余年に亘って三韓より貢物を徴しているのでありまして、古代における日本と大陸半島との関係は可成り密接で、『日本書紀』の四分の一は、大陸半島との交渉の記事で埋められているのであります。また古代における欧亜の交通は、近代の太洋航海時代に較べれば、絶無といってよい程稀薄でありますが、西紀前四世紀におけるアレキサンドル大帝の東征は、ギリシャ文明をイラン地方にまで東流せしめ、西紀七世紀におけるササン朝ペルシャの亡命は、イラン文化を唐に

伝え、奈良時代における日唐の交通は、イラン文化に含まれているギリシャ文明を日本に伝えたのでありまして、正倉院御物の中には漆胡瓶と称するギリシャ式の壺もあれば、玉碗と称するフェニキア製のガラス製品もあります。更に『正倉院薬物の研究』に拠れば、正倉院に蔵せられている薬草の原産地は、中央アジアよりカスピ海の沿岸にまで及んでいるのでありまして、日本は地理的には東海の孤島でありますが、文化的、政治的には決して孤立した国ではないのであります。故に日本の古代史を研究するには、世界史とまでは行かなくとも、せめて東洋史の大局面から日本を見つめてゆかなければなりません。ところが日本歴史学は明治以来日本史、東洋史、西洋史の専門に分たれ、日本史を研究する人は、日本の史料より見ないことが、日本史学界の伝統となっていますから、律令国家成立史の研究も、だんだん微に入り細を穿って研究されていますが、その原動力となった隋唐帝国の日本に加えた圧力といったような、中国、朝鮮、日本三箇国の史料を読破しなければ、ものが言えない問題については、研究が闕けているのであります。

戦後の新人といわれる日本史家の論著を見ましても、この孤立的日本史の枠を破った研究がないのは、私の最も歯ゆく感じている一事でありまして、史学に志される諸君が、将来この明治以来の専門化された狭い日本史学界の伝統を破って、日本史、中国史、朝鮮史等の畛域を除いた史学を樹立せられんことを切望して已みません。故長谷川如是閑氏は、ヨーロッパにおいては、エキスパートという言葉は、あいつは専門の事以外は何も知らぬ男だという、学者を罵倒する言葉であるが、日本ではエキスパートと言われなければ、学者としてメシが食えない。そこに日本の学問の大きな闕陥があり、学者の大きな悩みがあると申されましたが、至言であると思います。私なども日本法制史学の権威であるといわれて得意になっているようなことでは駄目で、もっともっと広く深く研究しなければならないと思ってをります。

日唐戦争第二期熱戦期のピークは、西紀六六三年、我が天智天皇の二年、唐の高宗の龍朔三年の秋、八月廿七、廿八の両日に行われた白村江の戦であります。鮎貝房之進氏の『日本書紀朝鮮地名攷』によれば、白村江は、唐史にいう白江口、『三国史記』、『三国遺事』にいう伎伐浦であって、錦江の河口なる今の鎮浦鎮の地であります。百済の国都は、雄

略天皇の御代、高勾麗に攻め落されてから、熊津に遷り、更に宣化天皇の御代、泗沘に移りましたが、熊津、泗沘は倶に錦江の沿岸にあります。熊津則ち『日本書紀』にいう久麻那利（クマナリ）は、今の公州であります。故に古くは錦江は上流の公州附近では熊川、中流の泗沘附近では泗沘河といい、下流を白江、白村江といったのであります。『三国史記』巻五新羅紀、武烈王（金春秋）七年七月条には

是日（蘇）定方与二副摠管金仁問等一。到二伎伐浦一。遇二百済兵一。逆撃大敗レ之。

とありますから、顕慶五年（西紀六六〇）七月、神丘道行軍大総管左武衛大将軍蘇定方は、山東の成山より水陸十万の兵を率いて、伎伐浦すなわち白村江に敵前上陸を敢行し、水陸より錦江を溯行して一挙に泗沘城を抜き、百済の義慈王をとりこにしたのであります。故に白村江の戦が行われた龍朔三年には、白村江は唐の水軍の根拠地となっていたと思います。安倍比羅夫の率いる日本の水軍は、州柔城（唐史にいう周留城、金庾信伝にいう豆率城であって、鮎貝氏に従えば、全羅北道、茂朱県の裳山古城がその遺蹟であるという）にいる福信を救わんとして白村江に到り、先に停泊している唐の艦船に対して戦を挑んだものと考えられます。『新唐書』劉仁軌伝には

於レ是（孫）仁師（劉）仁願及（金）法敏。帥二陸軍一以進。（劉）仁軌与二杜爽扶余隆一。繇二熊津一白江会レ之。遇二倭人白江口一。四戦皆克。焚二四百艘一。海水為レ丹。

とあって、白村江の戦が日唐両軍の海上遭遇戦であったかの如く書かれていますが、是れは唐人の虚飾でありまして、唐軍は前年以来白村江に陣取っていて、同地の水路、潮流、満干の落差等を知悉し、日本軍よりも遙かに有利な地位にあったのであります。戦時中海軍におられた村尾次郎氏は、軍事的見地から白村江の戦を研究されましたが、同氏の談に拠れば、白村江激戦の地は、遠浅の海で満干の差の甚しい所であるということでありますから、前々から其処に停泊していて、河口の複雑な水路や、満干の差を調査していた唐軍は、有利な条件にあったわけですが、唐人は劉仁軌の軍功を大ならしめんとして、これを日本軍と同一条件で戦った遭遇戦であったように書いているのであります。また唐軍が日本の艦

舩四〇〇艘を焚いたというのも、誇張の言であります。天智紀には、阿曇比邏夫の率いた艦舩は、一七〇艘と明記されています。『続日本紀』淳仁天皇天平宝字五年十一月丁酉条に拠れば、この時新羅を征伐するために、東海道の十二国に命じて用意させた艦舩が一五一隻、南海山陽の十二国に命じて用意させた艦舩が一二一隻、西海道の九国に命じて用意させた艦舩が一二一隻で、合計三九三艘に過ぎません。唐史の艦舩数には約二倍の水増しがあると見てよいでありましょう。これも劉仁軌の軍功を大ならしめんとして作意に出た虚数でありますが、恐らく仁軌の高宗に上った奏状にも四〇〇艘とあったと思います。二倍の嘘は唐人としては生やさしい方でありまして、時には十倍、数十倍に達します。隋の煬帝が高勾麗征伐に用いた兵は、『日本書紀』には卅万とありますが、『隋書』には総て一百一十三万三千八百人、二百万と号すとあります。

白村江の戦のことは、前記の劉仁軌伝に見える外、『資治通鑑』、『三国史記』、『唐書百済伝』等に見えますが、『資治通鑑』唐紀、太宗龍朔三年九月条に見える次の記事が最も信憑に値します。

於是。仁師仁願与二新羅王法敏一。将二陸軍一以進。仁軌与二別将杜爽扶余隆一。将二水軍及糧舩一。自二熊津一入二白江一。以会二陸軍一。同趣二周留城一。遇二倭兵於白江口一。四戦皆捷。焚二其舟四百艘一。煙炎灼レ天。海水皆赤。百済王豊脱レ身奔二高麗一。

我が『日本書紀』の白村江の戦の記事は、次の如くであります。

戊戌（十七日）。賊将至二於州柔一繞二其王城一。大唐軍将率二戦舩一百七十艘一。陣二烈於白村江一。

戊申（廿七日）。日本舩師初至者。与二大唐舩師一合戦。日本不レ利而退。大唐堅レ陣而守。

己酉（廿八日）。日本諸将与二百済王一。不レ観二気象一。而相謂之曰。我等争レ先。彼応二自退一。更率二日本乱レ伍中軍之卒一。進打二大唐堅陣之軍一。大唐便自二左右一夾レ舩繞戦。須臾之際。官軍敗績。赴レ水溺死者衆。艫舳不得二廻旋一。朴市田来津仰レ天而誓。切歯而嗔。殺二レ数十人一。於レ焉戦死。是時百済王豊璋。与二数人一乗レ舩。逃二去高麗一。

『日本書紀』は、この記事を天智天皇二年八月条に係けているのでありまして、唐史にいうところと一月の相違があり

ますが、これは日本暦のこの年の八月以前に閏月があったからでありましょう。

この日唐両史の記事を見くらべて、誰もが気のつく喰い違いは、唐史は日本の船を焚いたと言っているのに、日本史には船を焚かれたという記事の無いことであります。『資治通鑑』には、日本船の焚かれる炎と煙とが天を灼して、海の水がまっ赤になったとあるのでありますから、日本の船が唐軍の放つ火缸によって焚かれたことはたしかだと思います。そのつもりで『日本書紀』の文を読むと、脱文のあることに気がつきます。「官軍敗績ス。水ニ赴イテ溺レ死ス者衆シ」という文はおかしいと思います。我が軍が負けになったからといって、我が将卒が悲観して海に飛び込んで自殺したとは考えられません。「官軍敗績」の下には、「船所レ焚。欲レ逃レ火」の六字があったのが、転写の間に脱落したものではないでしょうか。『日本書紀』のテキストを改めるということは軽々しく行うべきことではありませんから、疑を存するに止めますが、「火ヲ逃レント欲シテ水ニ赴キ、溺レ死ス者衆シ」ならば、意味は暢達いたします。

火攻は古来中国人の得意とする戦法でありまして、宋代に成った中国の兵法書『武経総要』前集、巻十一には火攻法が述べられていますが、その中に水戦に用いる火缸のことが見え、その図が掲載せられています。それには

凡火戦。用二弊缸或木筏一。載以二蒭薪一。従二上風一順レ流発レ火。以焚二敵人楼舡戦艦一。

とありますが、この戦法を用いて大成功を収めたのは、かの有名な赤壁の戦であります。赤壁の戦のことは、『三国志』の呉志、周瑜伝にくわしく見えています。後漢の建安十三年（西紀二〇九）九月、曹操は荊州に入って劉琮を降し、その軍船歩兵数十万を獲て長江を下り、呉の孫権を攻めんとして赤壁（湖北省嘉魚県）に陣した。孫権の将周瑜は、部将黄蓋の策を用い、舳艫相銜んで密集停泊している曹操の艦隊の中へ、薪草を積んだ船を突入せしめ、油を灌いでそれを焚いたから、火は敵の楼舡戦艦に燃え移り、更に風に煽られて岸上の兵舎をも焼き払ってしまいました。この痛快ないくさのことは、『文章軌範』の赤壁の賦にも見えますから、昔は中学生にも知られていました。周瑜伝には「煙炎漲レ天。人馬焼。溺死者甚衆」とありますが、前の句は『通鑑』に採られ、後の句は『書紀』に採られています。劉仁軌は周瑜の故智

に倣い、風上より火缸を放って日本の船艦を焚いたに相違ありません。

『日本書紀』に拠れば、廿七日の緒戦においては、日本軍が負けています。それにも拘らず、唐軍は日本軍を追撃せず、退いて「陣ヲ堅クシテ守」ったとあります。唐軍が退いて陣を堅めたのは、日本軍に火缸を放つために風上へ廻ったものと思われます。日本軍がこれに気がつかなかったことは、廿八日条に日本の諸将が「気象ヲ見ズ」して先を争ったとあることによって知られます。日本軍の作戦は、先鋒の船が猪突猛進して敵の艦列を乱し、中堅の戦艦がこれに続いて唐の戦艦を各個に撃破するということにあったらしいですが、先鋒の船は唐軍のために左右から包囲されてしまったようです。このように唐の戦艦がうまく立ち廻ったのは、主将劉仁軌が旗艦に坐して属船に旗をもって号令を伝え、全艦が一糸紊れざる行動をとったからであると思います。『武経総要』前集、巻十一水戦には

凡水戦。以二船艦大小一為レ等。勝人多少。皆以レ米為レ準。一人不レ過二重米二石一。帆檣軽便為レ上。以二金鼓旗幡一。為二進退之節一。其戦則有二楼船・闘艦・走舸・海鶻一。其潜襲則有二蒙衝・遊艇一。其器則有二拍竿一。為二其用利一。順レ流以撃レ之。諸軍視二大将軍之旗一。旗前亜聞レ鼓進。則旗立聞レ金則止。旗偃即還。若先鋒遊奕等船。為レ賊所レ囲。以須二外援一。則視二大将赤旗一。向レ賊點則進。毎レ點一船進。旗前亜不レ挙、則戦船徐退。旗向レ内點。毎レ點一船退。若張二疑兵一。則於二浦泥一広設二旌旗帆檣一。以惑レ之。此其大略也。

とありまして、唐の水軍は、旗と鉦・太鼓とによって進退するように平生から訓練されています。北京へ行かれた人は万寿山頤和園の離宮に昆明池という大きな池のあるのを御存知でしょう。あの池は、明清時代に水軍の将士が大将軍の旗を見て船を進退することを練習した所であります。中国は海岸線に乏しい国でありますが、黄河、揚子江、珠江、淮河といったような大きな川があります。その川幅の広いことは、日本人には到底想像することができません。私は何回か南京、鎮江、揚州、杭州等のいわゆる江南を旅行しましたが、渡し船に乗って揚子江の中流に出ると、眼に入るものは渺々たる水ばかりで、両岸の陸地は見えません。日本には大きな川はないと聞かされて来た中国の留学生が、日本にも揚子江より

も大きい川があるので驚いたと語りましたので、それはをかしいとよく訊きたゞしてみたら、それは瀬戸内海だったという話がありますが、それは笑い話ではありません。杭州湾に注ぐ銭塘江の河口は、事実周防灘よりも広いです。海道一の大井川も、中国人に言わせれば、桃李言わざれど下自ら蹊を為すとあるあの「蹊」であって、江とか河とかいうものではないということであります。三国六朝の時代に、淝水の戦とか、赤壁の戦とかいう天下分け目の水上戦が行われたことは、みなさん御承知のことと思います。隋唐時代の江南人は、海国日本の飛鳥・奈良朝時代人よりも水戦に馴れていたのであります。信号旗によって船団が秩序ある行動をとり得る兵術も、三国六朝時代に発達したものでありまして、白村江の戦の唐将劉仁軌、杜爽などいう将軍は、そういう兵術をちゃんと身につけていたのであります。

南船北馬という語によって知られる如く、江南の地には水路が縦横に開かれていて、旅行者はみな船に乗って旅行し、船の中で夜を過しました。故に「月落千鳥啼イテ霜天ニ満ツ」という楓橋夜泊の詩も、白楽天の琵琶行の風流も生れるわけであります。今回の支那事変において、日本軍がクリークの多いのに悩まされたことは、諸君の記憶に新たなるところと思います。江南の人は、「潮来出島の真菰の中で菖蒲咲くとはしほらしや」というあの潮来水郷の百姓と同じく、田圃へ野良仕事に行くにも、田舟に乗って行きます。故に江南人は、農夫といえども舟をやることが上手です。白村江の戦に劉仁軌、杜爽の指揮に服した兵卒は、いずれも江南で募集せられた兵卒でありまして、船の操従には妙を得ております。

『資治通鑑』唐紀、高宗龍朔元年正月乙卯条には

募二河南北淮南六十七州兵一。得二四万四千余人一。詣二平壌鏤方行営一。

とありますから、白村江の戦に参加した唐水軍の兵士は、いずれも水戦に習える江南の兵士であったことが知られるのであります。

これに対して我が水軍の陣容、素質、兵員、武器、装備等はどうであったかを検討してみたいと思います。

まず我が水軍の軍船の数と、その塔乗せる軍士の数とでありますが、白村江の戦闘に参加したものは、我が百済救援軍

の一部分でありまして、私は軍船の数は百七、八十艘、軍士の数は八、九千人と算定しております。

我が百済救援軍は、斉明天皇七年九月に、鬼室福信の要請によって我が国に質となっていた百済の王子豊璋を護送するために遣わされた五千の軍士と、天智天皇二年三月に、その将軍が任命せられ、五、六月頃に博多の津から征途に上ったと推測せられる二万七千の軍士とから成っております。

天智紀、即位前紀には

九月。皇太子御二長津宮一。以二織冠一授二於百済王子豊璋一。復以二多臣蔣敷之妹一妻レ之焉。乃遣二大山下狭井連檳榔。小山下秦造田来津一。率二軍五千余一衛二送於本郷一。

とありますが、この九月は斉明天皇の七年（西暦六六一）年九月であり、秦造田来津は白村江の戦で勇戦して壮烈な戦死を遂げた朴市田来津であります。朴市（エチ）は依智でありまして近江国愛智郡に安置せられた秦氏の首領が多来津であります。この豊璋の手兵として授けられた我が五千の軍士は、福信に迎えられて周留城に立籠ったのでありますが、白村江の戦のあった天智天皇二年（西暦六六三）八月には、豊璋は狭井連檳榔をして周留城を守らしめ、自らは秦造田来津の率いる一隊を率いて城を出で、白村江の戦に参加しております。その軍士の数は二、三千人と算定してよいでありましょう。

天智紀、即位前紀には

八月。遣二前将軍大華下阿曇比羅夫連。小華下河辺百技臣等。後将軍大華下阿倍引田比羅夫臣。大山上物部連熊。大山上守君大石等一。救二於百済一。仍送二兵杖五穀一。

とありますが、これは前記五千の軍隊と、福信に対する援助物資である兵器と軍糧とを輸送する輸送船団の指揮官の任命であります。阿曇比羅夫は、筑前国糟屋郡志賀島に本居をもち、代々海人の宰として水主、拖師を支配して来た阿曇氏の氏上でありまして、航海術の権威でありますが、戦闘力はありません。故にその船団には新羅征伐に勇名を馳せた河辺氏の一族百枝がその手兵を率いて乗組んでいたのであります。阿倍引田臣比羅夫は、越前国敦賀郡匹田（愛発の関の近所）

に本居をもつ海上民の首領でありまして、斉明天皇の四年（西暦六五八）には、水軍を率いて鰐田（秋田）、渡島（北海道）の蝦夷、及び粛慎を伐っていますから、これは相当の戦闘力をもっています。しかし、当時の水戦は、舩を近寄せて弓弩を射かけ、更に舩を衝突させて敵舩に乗り移り、刀槍を振って敵兵を斬るというやり方でありますから、その舩団には物部連熊の手兵が乗組んでいたのであります。この二舩団は、豊璋を送り届けると同時に日本へ帰っていったのでありまして、この軍隊は白村江の戦と関係はありません。

天智紀、二年条には

三月。遣二前将軍上毛野君稚子。間人連大蓋。中将軍巨勢神前臣訳語。三輪君根麻呂。後将軍阿倍引田臣比羅夫。大宅臣鎌柄一。率二二万七千人一。打二新羅一。

とありますが、これが我が百済救援軍の主力であります。推古紀、十年条にも、来目皇子に二万五千の軍士を授けて新羅を撃たしめんとしたことが見えていますから、二万乃至三万というのが、当時の我が国が海外に派遣し得た軍隊の兵員でありまして、この二万七千人という数は、信頼に値すると思います。しかし、それは前、中、後の三軍の総数でありまし、上毛野稚子の率いる第一軍がどれだけか、巨勢神前訳語の率いる第二軍がどれだけか、阿倍引田比羅夫の率いる第三軍がどれだけかはわかりません。総数を三分して、一軍の兵員を九千人と算定する外はないのであります。

またこの百済救援軍の主力が博多の津を出帆した日、壱岐、対馬を経て、半島に上陸した日も、不明であります。上毛野稚子は前将軍とありますから、稚子の率いる第一軍は、任命のあった三月又は四月に博多を出発したと推察されます。上毛野氏は、舒明紀、九年条の上毛野君形名の伝にその祖先が蝦夷征伐、新羅征伐に耀しい武勲を樹てたことが見えていますから、その率いる軍隊は、東国の勁兵であったと思います。この軍隊を半島に送ったのは、阿曇比羅夫であって、比羅夫は秀吉の朝鮮征伐の役における九鬼嘉隆と同じく、百済救援軍主力の輸送指揮官を勤めたと推察せられます。第一軍を半島に送り届けた比羅夫は博多に引かえし、巨勢神崎訳語の率いる第二軍の輸送に当ったと思われますから、第二軍の

博多出発は五月、六月の頃と考えられるのであります。第一軍の上陸地は、洛東江の河口、金海附近であったと推定されますが、この第一軍は、新羅の沙鼻岐、奴江の二城を抜いて西進し、唐の百済の鎮将劉仁願の立籠る泗沘城に向ったと思われます。

右の天智紀二年三月条には、「二万七千人ヲ率ヰテ、新羅ヲ打タシム」とありますが、これは「唐及ビ新羅ヲ打タシム」の意にとらねばなりません。前々から繰返し述べているように、『日本書紀』は唐人が読むことを強く意識して書かれた史書でありますから、唐を打つとは書けないのであります。しかし百済を滅してその国都泗沘に鎮将を置いているのは、唐であります。その唐の駐留軍を追払って泗沘城を奪還しなければ、百済救援の目的は達成せられません。故に上毛野稚子は、直ちに泗沘城を目指して西進したと思うのであります。然るに鮎貝氏は「新羅ヲ打ツ」という書紀の文に囚われて、沙鼻岐、奴江の二城を洛東江の左岸に比定しておられますが、これは誤で、この二城は洛東江の右岸、洛東江口から泗沘城に進軍する我が軍の道筋にあった新羅の城であると思います。

第一軍の輸送を終って第二軍の輸送を始める二、三ケ月のうちに、形勢は一転しました。百済回復軍に包囲されていた劉仁願は、本国に援兵を乞うていましたが、孫仁師を将とする唐の援軍七千は、五月ごろに山東の兵を率いて泗沘城に到着し、唐軍の勢力は増加しました。またこの五、六月頃に福信は、百済回復軍の勇将道琛を殺し、豊璋はまた福信を殺しました。回復軍はその為めに弱体化し、攻勢より守勢に転じ、周留、任存の二城を守るに至りました。依って豊璋は、日本と高麗に使を出して、援兵を乞うたのであります。

依って第二軍は、周留城にある豊璋を救うために、錦江の河口なる白村江に急行することになったのであります。周留城の位置はよくわかりませんが、鮎貝氏はこれを全羅北道、茂朱県の南十五里にある裳山古城に擬しておられます。その位置は泗沘城の西北で、白村江と泗沘城からは略等距離にあります。この第二軍の主将には、巨勢神前臣訳語が任ぜられていたのですが、廬原君臣が代って任ぜられたものとみえまして、豊璋は、周留城を出て廬原君を白村江に迎えていま

す。廬原は駿河の地名ですから、その手勢には、東国の勁兵もいたと思いますが、この第二軍は主として山陽、南海、西海三道諸国の兵より成っていたと思います。その船団を指揮した者は、輸送指揮官の阿曇比邏夫であったでしょう。

第三軍は、海軍に馴れた阿倍引田比邏夫が自ら指揮して、白村江に近い豆礼城の海岸に上陸することになっていたようですが、出発がおくれ、豆礼城に着いたのは、白村江の戦がすんだ後でありました。故に白村江の戦に参加したのは、廬原君臣の率いる第二軍と、豊璋の手勢の一部である朴市田来津の部下の軍士だけで、その兵員は一万足らずであったと思います。

これを乗せた阿曇比邏夫の率いる船が何隻あったかはよくわかりませんが、『続日本紀』、天平宝字五年（西暦七六一）条に見える新羅征伐の為めに用意した兵員四万七百人に対して船三百九十四隻でありますから、一万足らずの兵員を乗せた船は、その割合で計上すれば、百隻足らずであります。しかし、天智十年紀には、唐の使郭務悰の一行約二千人が船四十七隻に分乗して壱岐、対馬に来航したことが見えています。この割合で計上すれば、白村江の戦に出た我が水軍の軍船は二百艘になります。故に私は、その中間を取って廬原君を主将とする第二軍の軍船を百五十隻以上と推定し、唐の軍船百七十艘と船の数においては、略相当るものであったろうと想像しているのであります。また白村江の戦に参加した唐軍の兵は孫仁師が率いて来た七千の新手に劉仁願の手兵が加わっていますから、これも一万足らずで、兵数も、略相当ったかと思います。

しかし、唐の水軍と我が水軍とでは、船の大きさ、その装備、機動力に格段の差があったようであります。我が軍船は、村尾氏の「白村江の戦」（『軍事史学』第七巻第一号）に拠りますと、長さ十五丈、広さ二丈の楠船で、刳舟を船底とし、両舷側に張出しをつけて、その外側に縁板をつけたゴンドラ式のものであったとのことであります。宮崎県の西都原古墳からは、船型の埴輪が出ていますが、丁度あのような船で、片舷十五挺櫓（三十挺立）で、帆と舵とがあります。

唐の軍船の構造は、『武経総要』の記事によって推察することができると思います。『武経総要』に拠れば、水戦に用

いられる舩には、楼舩、闘艦、走舸、海鶻、蒙衝、遊艇の六種類があり、その種類によって夫々構造が違っています。近代の海軍が戦艦、巡洋艦、駆逐艦、砲艦、水雷艇等の各種の舩を取り合せて一艦隊をなしているのと同じように、唐の水軍はこのように機能を異にした軍舩によって組成せられていたのであります。『武経総要』には

闘艦者。舩舷上設二女墻一。可レ蔽二半身一。墻下開二掉空一。舩内五尺。又建二棚与女墻一。斉棚上又建二女墻一。重二列戦士一。上無レ覆、背前後左右、竪二牙旗金鼓一。

とあって、闘艦の図がありますが、正しくそれは「浮べる城」であります。曹操が呉を伐つときに造らせた大舩は、乗員二千人、甲板に馬を走らせて命令を伝えたと伝えられています。劉仁軌の乗っていた旗艦は、その十分の一としましても、二百人の将兵が座乗していたことになります。故に舩の数は同じぐらいであっても、日本の水軍は到底唐の水軍に敵し得ません。噸数で計れば、唐軍の三分の一にも及ばなかったでありましょう。兵数は略同様としても、水上の戦では、乗っている軍士が多ければ多い程、舩の機動力を妨げる結果となって、日本軍の不利となります。我が水軍の水手、拖取は、安曇族より成っていたから、舩の機動力においては、唐の水軍に劣らなかったと思うのですが、『日本書紀』には、我が軍舩が「艫舳廻旋スルコトヲ得ズ」して敗れたとありますから、機動力においても、唐の軍舩に及ばなかったもののようであります。

唐軍の使用した武器は、『武経総要』によれば、弩と抛石とでありますが、弩は我が軍も使用したと思います。三善清行の意見封事十二箇条には、我が国の弩は、神功皇后の奇巧によって出来たものであって、その性能は唐国の弩に勝るとあります。抛石は、養老の軍防令に

凡衛士者、中分、一日上、一日下。毎二下日一、即令下於二当府一、教二習弓馬一、用レ刀、弄レ槍、乃発レ弩、抛レ石。

とあります。しかし日本の舩は小さいから、抛石の器械を積むことはできなかったと思います。唐の戦艦は、この外に拍竿という武器を備えていました。拍竿はお寺の本堂の柱のような太い棒でありまして、舩の速力を利用してこれで敵の舩

を突き砕くのであります。このような武器は勿論日本の舩は備えていなかったでありましょう。

このように見て参りますと、日本の水軍が唐の水軍に勝てる道理はありません。白村江の戦は負けるべくして負けたのでありまして、従軍将士が怯懦であったからではありません。朴市田来津が憤激して敵数十人を殺したのは、弘安の役に河野道有が檣を梯子にして敵舩に躍り込み、蒙古人数人を斬ったのと同じように、敵舩に乗り移って、刀を振って唐人を斬ったのでありましょう。朴市田来津は、近江の国愛智郡の豪族で、秦氏であります。愛智郡には、推古天皇の御代に遁甲兵術を伝えた百済僧観勒の住した百済寺があります。故に愛智郡の百姓はみな兵法に通じていたので、百済救援軍に従軍せしめられたのでありまして、田来津はその部隊長であったと思います。この白村江の戦に出征した近江人の子孫が、戦国大名に抱えられて活躍した甲賀、伊賀の忍者であります。

白村江の戦に日本軍の敗れるのを見て、百済王豊璋は、高勾麗に亡命し、州柔城に拠っていた百済の衆も、九月七日、孫仁師、劉仁願の率いる唐の陸軍と、金法敏（文武王）の率いる新羅軍との聯合軍に攻められて唐に降り、百済は全く亡びました。天智紀、二年九月丁巳（七日）条には

百済州柔城始降二於唐一。是時国人相謂之曰。州柔降矣。事無二奈何一。百済之名絶二于今日一。丘墓之所豈能復往。

と、百済人の痛切な亡国の歎きが述べられています。前漢成帝の鴻嘉三年（西暦前一八）、百済の始祖温祚が国を肇めてから、六百八十二年にして百済は亡んだのであります。

百済の士大夫である達率、恩率、徳率たちは、唐に降り、唐の辺吏となって百済の人民を治めしめられたのでありますが、唐に降ることを屑しとしない百済の士大夫は、白村江の戦に間に合わなかった阿倍引田比邏夫の率いる第三軍の舩に乗って、豆礼から日本に亡命して来ました。周留城にあった狭井連檳榔の配下の残卒も、この舩に乗って引揚げたと思います。

日本に亡命した百済の貴族は、天智天皇の十年正月、夫々その本国における位階に応じて、日本の位階を授けられまし

た。中国においては、隋の遺臣は、隋の位階に応じて唐の位階を授けられています。故に唐は隋の後継者であるわけであります。故に百済の官位の高下に従って、百済の遺臣に日本の位階を授けた日本は、百済の後継者であります。故に私は、天智朝の日本は、これを日本百済聯合王国と呼ぶべきであると思います。奈良時代には、日本に留っていた百済の王族は、百済王の称号を聴され、皇族並みに取扱われました。それは日韓併合によって朝鮮の李王家が殿下の称号を聴されたのと同じであります。李王家と梨本宮家の婚儀によって李王家が皇族と縁戚になったように、桓武天皇は百済王家の女の腹に生れられ、百済王家は皇族の縁戚となりました。

百済の貴族は、我が国の官位を授けられて、律令官人の中に溶け込んでしまいましたが、その中の主たるものは、法官大輔に任ぜられた沙宅紹明、学頭職に任ぜられた鬼室集斯、大宰府の大野城を築かせられた憶礼福留、大学博士に任ぜられた許率母、外薬寮頭に任ぜられたと思われる吉大尚等でありまして、令制の技術官は殆ど彼等によって占められました。また沙宅紹明、鬼室集斯らは、近江令の編纂にも与っていますから、百済の滅亡による百済貴族の亡命は、日本の律令制度の整備に大きな貢献をしているのであります。佐平余自信と鬼室集斯とは、天智天皇の八年に、その一族従類七百余人と共に近江国蒲生郡に安置せられました。今も蒲生郡蒲生町には、彼等によって建てられた石塔寺の三重の石塔がありますが、その石塔はソウルのパゴタ公園にある石塔とよく似ています。また蒲生町日野町には、鬼室集斯を祀った鬼室神社もあります。この地から近世の近江商人が現われたことも、遇然ではないのであります。

百済救援軍の第三軍の軍船が、引揚げ船になってしまったのは、奇しき運命であります。お蔭で第三軍の後将軍阿倍引田臣比羅夫は生還して、後に大宰帥に任ぜられました。『続日本紀』、養老四年正月庚辰条には

大納言正三位阿倍朝臣宿奈麻呂薨。後岡本朝筑紫大宰帥大錦上比羅夫之子也。

とありますが、後岡本朝（斉明朝）は、近江大津朝の間違いだと思います。白村江の敗報を聞かれた天智天皇は半島に留っている上毛野君稚子の第一軍に対して引揚げの命令を発せられました。豊璋が高勾麗に亡命してしまったのでは、百済

救援の名目は無くなってしまったからであります。上毛野君稚子の率いる第一軍は無事に引揚げて来ました。白村江の戦に勝った唐の水軍は、直ちに高勾麗を伐つために大同江口へ向いましたから、我が軍の引揚げを妨害することはできなかったのであります。この第一軍に属した東国の勁兵の一部は、壱岐、対馬に留って、唐軍の追撃に備えしめられました。天智三年紀には是歳。

於二対馬嶋。壱岐嶋。築紫国等一。置二防人与レ烽。

とありますが、その防人は、第一軍引揚部隊の東国兵でありまして、爾後孝謙天皇の天平宝字元年に至るまで、遠江以東の兵士が防人となって対馬、壱岐に上番したのは、この因縁によるものであろうと、私は考えています。

日唐戦争の第二期熱戦期の話を終るに先立って、補っておかねばならないのは、この期における新羅の動きであります。新羅が唐と同盟して日本、高勾麗、百済の三国同盟に敵対したことは、前述の通りでありまして、百済人は、新羅が唐を引き込んで百済を亡したといっております。また高勾麗の沙門道顕が著した『日本世記』（斉明六年紀所引）にも

新羅春秋智（金春秋）不レ得二願於内臣蓋金一故。亦使二於唐一。捨二俗衣冠一。請二媚於天子一（唐太宗）。投二禍於隣国一。而搆二斯意行一者也。

とあって、新羅が高勾麗を滅した張本人のように言っております。しかし、高勾麗を滅そうという禍心を起したものは、隋の煬帝、唐の太宗、高宗でありまして、新羅は唐のお手伝をしたに過ぎません。また白村江の戦によって、新羅が常に討伐を受ける日本が半島から追い落されてしまったので、新羅は唐の軍事力を利用して、日本の勢力を駆逐してしまったと考えられています。その後新羅は唐軍を半島から追い出して、半島を統一いたしましたから、新羅は巧みに他人の褌で相撲をとり、半島統一に成功した狡猾な国である、という風に考えられています。しかし、これは前にも申しましたように、結果論でありまして、新羅の金春秋（武烈王）や金庾信は、決して始めからそういうことを計画してやったものではないのであります。

金春秋は、まだ即位しないで王子であったときに、新羅は日本と百済とに攻め立てられるので、高勾麗に味方になってくれるように頼みに行きましたが、高勾麗と日本との間には既に同盟が成立していましたので、高勾麗の内臣泉蓋蘇文は、それを聴き入れないばかりか、金春秋を捕えて監禁してしまいました。金春秋は忠臣金庾信の秘計によって、やっと脱出して国へ帰りましたが、この事によって金春秋は深く高勾麗を恨んだのであります。ついで金春秋は、孤立無援に陥った祖国を救うために、唐に赴いて太宗に謁し、その援助を求めたのであります。太宗は中国の恥を雪ぐために高勾麗を伐とうと思っていたときでありますから、その請いを聴すと同時に、春秋の人物に惚れ込んで、破格の厚遇をして春秋を国に帰しました。その感激は春秋、庾信の生涯忘れ得なかったことでありまして、新羅が唐一辺倒となって、衣冠をも唐風に改め、唐の太宗、高宗の高勾麗征伐に兵を出したり、唐の平壌攻囲軍に兵糧を送ったりしたのは、その為めであります。また春秋が百済に対して深い怨みを懐いたのは、新羅の善徳王の十一年（西暦六四二）、百済の義慈王が新羅の大耶城を攻略したときに、城を守っていた春秋の娘婿である都督品釈を殺したのみならず、その妻である春秋の娘をも殺し、その遺骨をも引渡しませんでした。春秋はこれを聞いて柱に倚って立ち、終日またたきもせずして人が前を通っても気がつかず、やがて「嗟乎、大丈夫、豈百済を呑む能はざる乎」と言ったとあります。故に春秋は、唐の高宗の百済急襲には、その子法敏（文武王）に兵舩一百艘を領せしめ、唐の百済征討軍を徳物島に迎えしめました。泗沘城が陥り、百済王義慈、太子扶余隆が唐将蘇定方、金法敏の馬前に降ったときには、法敏は扶余隆の面上に唾きし、「向ニ汝ノ父我ガ妹ヲ枉殺シテ之ヲ獄中ニ埋メ、我ヲシテ二十年間痛心疾首セシメタリ。今日汝ノ命吾ガ手中ニ在リ」と罵っています。

新羅の武烈王（金春秋）、文武王（金法敏）は、高勾麗、百済に対しては、このような深い怨みを懐いていましたが、日本に対してはさまで深い怨みはなかったのであります。武烈王は嘗て人質として日本にいたことがありますので、日本の事情に通じ、日本の実力をよく知っていました。故に唐に味方はするが、日本を敵としたくないというのが、新羅の真意であったと思います。故に文武王は白村江の戦のときも、劉仁軌の配下に立って日本人と戦うことを避け、自らは手勢

を率いて劉仁願、孫仁師と共に州柔城（周留城）の攻撃に当っています。『三国史記』、巻四十二の金庾信伝には、文武王が豆率城（州柔城）を攻めたとき、城中には日本兵（豊璋に附せられし狭井連檳榔の手勢ならん）も居りましたが、文武王は、その日本兵に「惟我爾ノ国ト海ヲ隔テテ疆ヲ分ツ。未ダ嘗テ交構セズ。但好ミヲ結ビ和ヲ講ジテ聘問交通ス。何故今日百済ト同悪シテ以テ我ガ国ヲ謀ルヤ。今爾ノ軍卒我ガ掌握ノ中ニ在ルモ、之ヲ殺スニ忍ビズ。爾其レ帰リテ爾ノ王ニ告ゲヨ」と言って、その行く所に任せたとあります。

戦後の日本史家は、マルクスの唯物史観を採らない人々でも、西洋史学の影響を受けて、人よりも物を重く観て、個人の思惑とか感情といったものを殆ど無視しています。しかし歴史は人間の歴史、個人の集団である国家社会の歴史であって、物の歴史ではありません。馬の歴史、牛の歴史というのは、人間が馬や牛をどう利用して来たかという歴史でありまして、牛馬そのものの歴史ではありません。牛馬そのものの歴史は人間にはわかりませんし、わかっても何の足しにもならないことであります。社会の動きも個人の活動なしにはあり得ませんが、その個人である人間は、理性と感情とによって行動するものでありますから、個人の感激、怨恨といったような深い感情は、歴史の上でもっと大切に考えなければなりません。漢の代に太史公が社会に大きな影響を与えた個人の伝記を列ねて歴史とする列伝体の歴史が生れてから、数千年後の近世に至るまで、その伝統が保たれたということは、理由のあることでありまして、それは東洋人の智慧ではないかと思うのであります。フー（who）、ホエン（when）、ホエアー（where）というスリー・ダブリュ（3W）は歴史の三本柱でありますから、人を柱として書かれた列伝体の歴史というものは、今はやらないからといって、そう軽々に棄て去るべきではないと思います。従って日唐戦争の原因についても、私は新羅人や唐人の感情に重きを置くのであります。唐の高宗は、唐が百済を伐てば、日本は黙ってはいないということをよく知っていました。故に高宗は、斉明天皇の五年（乾慶四年）七月に日本から遣わされた遣唐使坂合部連石布、津守連吉祥、伊吉連博徳の一行を抑留して帰しませんでした。この一行が長安と洛陽との二ケ所に分たれて、苦しい抑留生活を送ったことは、斉明紀に引かれている『伊吉博

徳書』に明記されています。高宗は、百済を電撃する作戦が日本に漏れることを恐れたのであります。故に高宗は、日本が参戦して来れば、これを粉砕してやろうという意思をもっていたことは明かでありまして、白村江の戦は、唐が己むなく戦うた戦ではなく、唐が始めから意図し、計画した戦であったのであります。然らば高宗は何故に日本を悪み、これを敵とするに至ったかというに、私は舒明天皇の御代に日本が唐の太宗が遣わした使高表仁を追い返したことが、その近因であると思います。日本は中国の藩臣ではないのでありますから、藩臣の礼を以て太宗の爾書を受け取れといって頑張る高表仁を追い返したのは、日本としては当然のことでありますが、唐人にとっては我慢のできない屈辱であったのであります。太宗は高表仁の復命を聴いて大いに怒り、侍臣に対して日本を懲罰しろと言ったろうと思いますが、その感情が高宗に承け継がれていったのであります。また太宗は、暗愚なる煬帝が、聖徳太子に菩薩天子とおだて上げられ、日本の留学生に中国の兵法を学び取られたことを口惜しく思い、日本人の姦譎を憎んだでありましょう。私は七世紀の東洋において、日唐両国民が生活の必要から相争わざるを得なかったとは考えられません。日唐戦争は日米戦争と同じく、日唐両国民の思想感情の睽離から起ったものと考えます。すべての異民族を東夷西戎南蛮北狄と侮り、相手が臣礼を執らなければつき合わないという漢民族の中華思想と、民族の誇り高き日本人の自主的精神とは、どうしても両立しません。中国はこの中華思想のためにイギリスと戦い、惨禍を被りました。阿片戦争の遠因は、ヴヰクトリア女王の使節マカトニー卿が、熱河の離宮において清国の皇帝に対して三跪九叩の礼を強要せられ、マカトニー卿が席を蹶って立ったことにあるのでありまして、阿片戦争の曲はすべて英国側に在るとは言い得ません。爾来一世紀に亘って中国は諸外国のために苦しめられましたが、漢民族の中華思想は貧乏ゆすりもしていません。今なおそれが健在であることは毛沢東の行動を見ても、台湾に蹐跼している蔣介石の言辞を見ても、明かにそれを知ることができるのでありまして、日本と中国とが対等に交際することは、将来においても望み得ないと私は考えています。

中国人の中華思想が自慰的な己惚れに過ぎないならば、我々は何もこれを問題にするには及びません。しかし、中国人

は為し能うならばこの中華思想を他国民に押し付け、聴かれざるときは、その国を庸懲するという実際的行為に出る性格を持っているのであります。その危険なる中国人の性格が最も明らさまに現われているのが、この日唐戦争であります。私共は中国の欧米列強の侵略を受けて清朝が瓦解し、漢民族の意気が頗る揚らない時代に生をこの世に享けました。従って我々と同時代の日本人は、中国人を平和を愛好する国民であると考えています。しかしそれは甚だ近視眼的な観方でありまして、中国三千年の歴史を通観すれば、中国人は中華思想を振り廻し、四隣の異民族の国々を征服せんとした大いに戦を好む国民であります。林梧堂は頻りに中国人が平和を愛好する国民であることを世界に向って宣伝していますが、我々はその宣伝に惑わされてはなりません。秦の始皇、漢の武帝、隋の文帝の時代といったような、中国が鞏固な統一国家をもって民族の意気が昂揚した時期には、中国は罪とがもない異民族を伐って周囲の民族に深刻な苦難を経験させています。中国の過去を振り返ってみれば、中国人が平和愛好の国民であるなどとは言えた義理ではありません。

隋の文帝の南北統一、その後を継いだ唐の太宗、高宗の時代の中国によって、征服戦の惨禍を被ったものは、高勾麗、百済、日本、新羅その他突厥、吐蕃等の諸国民諸民族でありまして、その苦難にくらぶれば、中国人が満洲事変や支那事変によって受けた苦難などは、ものの数でもありません。白村江の戦に海底に沈んだ日本人は数千人に過ぎませんが、日本はその戦の後、唐の侵寇に備えて対馬、壱岐に烽と防人とを置きました。『万葉集』、巻廿には、東国の兵士が妻子と別れて防人となって西陲に赴く悲しい歌が九十二首載せられています。また『万葉集』、巻十六には、山上憶良が老漁夫に代って対馬の防人の粮を運ぶことを引き受けた志賀の荒雄が、海難に遭って溺死したのを悼んだ歌があります。この苦難この悲惨事は、いずれも好戦的な唐人の征服慾によって起されたものに外なりません。中国も将来富国強兵の実を挙げ、背後のソ聯の脅威もなくなってしまう時が来たら、日本に対してどんな態度をとるか、知れたものではありません。

『大日本戦史』に収められている竹内少将の「日唐戦争」には、白村江の敗争を叙した後、

全般の情況上、如何に屈辱的条件の下に唐と和を講じ、涙を呑んで帰還したかが想像されるのである。

とありますが、朝鮮にある我が百済救援軍の将士らは、天智天皇の帰還命令を奉じて内地へ引揚げたのでありまして、唐に対して和を請うておりません。竹内少将は、日唐戦争を近代国家間の戦争と同じように考えられ、日本が白村江の海戦に敗れた以上は、朝鮮海峡の制海権も唐軍に帰したものと考えられたようでありますが、唐の海軍も白村江で打撃を被りましたし、唐はまた艦隊を大同江岸に廻航せしめて直ちに平壌を攻撃する必要がありましたので、我が百済救援軍の引揚げを妨げることができなかったのであります。

日唐戦争の和議は、白村江の戦の直後、いくさに勝った唐の方から申入れられました。それが妥結したのは、持統天皇の御代と推測されますが、その時期はハッキリいたしません。しかし、文武天皇の大宝元年（西紀七〇一）の遣唐持節使粟田朝臣真人の一行が親善使節であることは明かでありますから、媾和はそれ以前に成立したに相違ありません。日本は白村江の戦の直後、西陲の防備を厳にし、怨敵御参なれと唐軍の来襲を持ち受けましたが、唐はその後新羅に叛かれ、半島で新羅と戦うこととなりましたので、日本に攻め寄せることはできませんでした。日本も亦白村江の戦の後、壬申の乱が起りまして、力を外に用いることが出来なかったので、半島に反撃することはできませんでした。故に白村江の戦以後の二、三十年間は、両国は睨み合いの形勢で、日唐の兵士が戦場に相見えることはありませんでした。故に私は白村江の戦以後の二、三十年を日唐戦争の第三期「対峙期」と呼ぶことにいたしました。

白村江の戦の唐将劉仁軌は、その後高宗に信任せらそて宰相となり、則天武后の初世には内閣首班である尚書左僕射となって、大国唐の国政を総攬した大政治家でありまして、一介の武弁ではありません。唐が高宗の代に及んで「売家と唐様でかく三代目」といったようなことにならなかったのは、全くこの人の力でありまして、劉仁軌は、太宗の房元齢、魏徴に比肩せらるべき高宗の功臣であります。故に彼はいくさに勝ったからといって、マックアーサーが日本人を十二歳以下だと軽蔑したような傲慢な考えは持ちませんでした。彼は白村江の戦における日本兵の勇敢なる働きを見て、日本の軍事力の侮るべからざることに気がついたようであります。彼は、喜怒哀楽の感情に囚われることなく、人をよく観察して

その人物を見ぬく叡智をもっていました。彼は百済の残党を討伐中、任存城に拠って唐軍に抗していた百済人黒歯常之の誠実なる人物であることを見抜いて、これを招致して高宗に進めました。黒歯常之は、『唐書』の蕃将伝に伝を立てられている程の豪い将軍でありますが、これを見出したのは、劉仁軌であります。故に劉仁軌は、日本には天智天皇という豪い英主と中臣鎌足という賢臣とが心を合せて国家を経営しているから、日本という国は侮れないということをちゃんと知っていたと思います。近代のヨーロッパ人は、師団と軍艦の数で国の軍事力を測りますが、古代の東洋人は、その国にどういう大政治家、大軍略家がいるかということによって、国力を測ったのであります。『大織冠伝』には

皇太子（天智天皇）遷二居于長津宮一。猶聴二海表之軍政一。時謂二侍臣一曰。伝聞。大唐有二魏徴一。高麗有二蓋金一。百済有二善仲一。新羅有二庾淳一。各守二一方一。名振二万里一。此皆当土俊傑。智略過レ人。以二此数子一。比二朕内臣一。当レ出二胯下一。

とありまして、天智天皇は唐に名臣魏徴があり、新羅に忠臣庾淳（金庾信）のあることを知っておられたのです。七世紀の東洋は、このように人物に対する関心の深かった時代でありますから、劉仁軌は勿論日本に中臣鎌足のあることを知っていたと思います。

『資治通鑑』、巻二百一の高宗麟徳元年（西六六四）十月庚辰条には、検校熊津都督劉仁軌が高宗に上った長文の奏言が載せられています。その奏言には

臣伏覩二所レ存レ戍兵一。疲羸者多。勇健者少。衣服貧敝。唯思二西帰一。無レ心二展効一。

とありまして、仁軌配下の唐兵は、みな長期に亘る征戦に倦いて戦意を失い、帰心矢の如くであったことが知られます。またその奏言には

自二顕慶五年一以来。征人屢経二渡海一。官不二記録一。其死者亦無二人誰何一。州県毎レ発二百姓一為レ兵。其壮而富者。行銭参逐。皆亡匿得レ免。貧者身雖二老弱一。被レ発即行。

とありまして、唐の財政も、従軍の兵を記録して勲位を授け、戦死者を弔祭してその遺族の租税を蠲免することができな

いまでに窮迫していたことが知られます。故に仁軌は、この兵を率いて日本の本土に攻寄せれば、唐は必ず隋の煬帝の轍を踏むであろうことを見透していたのであります。それのみならず、彼は日本人に根性のあることを洞察していました。彼は日本は必ず白村江の恥を雪がんとして、半島に捲土重来してくる。白村江の戦では幸に勝ったが、同じ敵に対して同じ戦法で再び勝つことはできない。唐軍は敗れて、百済は復活する。彼がそう考えたことは、右の奏言に

陛下留二兵海外一。欲レ殄二滅高麗一。百済高麗旧相党援。倭人雖レ遠亦共為二影響一。若無二鎮兵一。還成二一国一。

といっている、その口吻によって察することができます。

劉仁軌がこのように考えたのは、大きな錯覚で、当時の日本には半島反攻の計画もなく、またこれを行う実力も無かったと思います。しかしそれは後世の史実から見て言い得ることでありまして、劉仁軌の日本過大評価を嘲うのは誤りであります。そういえば日本の天智天皇も大きな錯覚を起しておられたわけで、唐軍が瀬戸内海にまで侵入して来て、難波に上陸することを予想し、河内と大和の堺に高安城を築き、米と塩とを積ましめておられますが、当時の唐はいわゆる強弩の末勢でありまして、瀬戸内海どころか大宰府までも進攻することはできなかったでありましょう。しかし、戦争というものは、そのようなものでありまして、昭和二十年八月九日、ソ聯が不可侵条約を破って満洲に侵入して来たときには、ソ聯の参謀作戦局長シテメンコ将軍は、百万の関東軍がまだその儘満洲にいるものと考えて、兵百十五万、火砲と迫撃砲二千六百門、戦車五千五百輌、飛行機三千九百台を用意して来たのであります。故に軍備というものは、大きな浪費でありまして、用意した兵器や城塞がすべて実戦の場合に役に立つものではありません。

唐の国力も限界に来た、この上日本を敵とすることは、唐の国祚を縮めると判断した劉仁軌は、白村江の戦のあった年の翌年、高宗の上聞に達せしめることなく、百済鎮将劉仁願の名において、我が朝に和平の使を送って来ました。天智紀、三年五月甲子条には

百済鎮将劉仁願。遣二朝散大夫郭務悰等一。進二表函与二献物一。

とありますが、この献物を伴うた表函が、辞を低うして日本の復讐心を宥め、唐がこれ以上日本と戦う意図のないことを縷説したものであったことが推察せられます。和平の使郭務悰がどんな人かよくわかりませんが、池内宏博士は百済人の唐に降った者であろうといっておられます。その推察は当っていると思います。中華意識の強い唐人を使に充てれば、高表仁のように追い返されるかも知れませんから、劉仁軌は和平の使にこの百済人を選んだのでありましょう。鎌足はこの使を白村江の恨みがあるからといって斬ってしまうような無茶なことはしませんでした。北条時宗が元の使を七里ケ浜に引出して斬ったのは、感心のできない野蛮行為で、日本歴史に汚点を留めたものだと思います。鎌足は郭務を優遇して宴を賜い、また沙門智祥を使として物を送りました。天智紀、三年十年乙亥朔条には

宣発二遣郭務悰等一。是日。勅二中臣内臣一。遣二沙門智祥一賜二物於郭務悰一。

とあります。物を賜うに国籍を超越した僧侶を使に充てたところに、鎌足の細い心遣いが窺われます。しかし、郭務悰は天子の書を持っていないというので、外国使節としての待遇を与えられませんでした。『善隣国宝記』天智三年条には

在二百済国一大唐行軍摠官使人朝散大夫郭務悰等至。披二覧来牒一。尋二省意趣一。既非二天子使一。又無二天子書一。唯是総管使。仍為二執事牒一。牒是私意。唯須二口奏一。人非二公使一。不レ令二入京一。云々

とあります。しかし、表函に対しては返書が与えられました。その返書には「鎮西将軍日本鎮西筑紫大将軍牒」と封題されていますが、その内容は鎌足の意に成ったものであること、いうまでもありません。筑紫に下って郭務悰を訊問したのは、伊吉博徳であります。前掲の『善隣国宝記』には

十二月。博徳授二客等牒書一函一。函上着二鎮西将軍日本鎮西筑紫大将軍牒一。

とあります。返牒の内容は、来牒の旨、天皇に口奏するであろうという程度のもので、和平の提案を承け容れるとも拒否するとも書いてなかったと思います。

しかし、郭務悰が受けた待遇によって、日本が敢えてその提案を蹶って、あくまでも唐と戦おうとするものでないこと

は、よくわかります。劉仁軌は、これは脈があると見てとりましたから、翌四年には、朝散大夫沂州司馬上柱国劉徳高を使とし、六年には、熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聰を使として、和平交渉を繰返しました。これに対して鎌足も、それらの使の送使として、境部連石積、河内直鯨等を百済に遣して唐の占領下にある百済の状況を偵察せしめたのであります。これらの送使は唐の出先官憲である百済鎮将の許に遣わされたのでありますから、『日本書紀』には「唐ニ遣ス」と書かれています。しかしこれは鎮西将軍の牒状をもって熊津までしか行かなかった使でありますから、これを国書を齎らして長安洛陽に赴いた遣唐使と同列に視ることは許されません。森克己氏の『遣唐使』（至文堂刊）が、これを粟田真人らの遣唐使と同視して、石積を第五回、鯨を第六回の遣唐使としているのは、誤解を招く書き方であります。

この仁軌と鎌足との間に重ねられた和平交渉は、仁軌の朝鮮在任中、鎌足の生存中には実を結びませんでした。唐の本国においては、四戦皆捷つという白村江の捷報を見て、日本与し易しとなし、唐が高勾麗を討滅した余威を駆って、日本をも討ち滅してしまえという意見が盛んであったからであります。長安、洛陽には日本討伐の軍功によって王公になろうという野心家がたくさん居て、日本征服の計画が立てられました。それを聞いて驚いたのは、白村江で捕虜になって、長安か洛陽で捕虜生活を送っていた筑紫の国上陽咩（八女）郡の軍丁大伴部博麻であります。博麻は何とかしてこれを朝廷に知らせなければならないと考えて、自分の身を奴隷に売り、その値を同じく捕虜生活をしていた土師富杼に与えました。それを旅費にして富杼は脱走して終に日本まで帰り着きました。全く日露戦争の時の沖禎介、横川省三のような愛国美談であります。

しかし、弘道元年（天武天皇十一年、西暦六八三）十二月、高宗崩じ、武周革命が行われるに及んで、唐国の情勢は一変しました。前代外征の失政は鋭く批判せられ、唐国には和平の気分が漲り始めました。この時、日本との和平の提唱者である劉仁軌は、尚書左僕射に任ぜられましたから、仁軌はかねて妥結されていた日本との和平案に則天武后の裁可を仰ぎ、日唐両国の和議は、爰に正式に成立するに至ったと推断されますが、それが何年のことであるか、どういう条件で和

平が成立したのか、何人がその外交の衝に当ったのか、史料は全く闕けていて、詳細を明かにすることはできません。則天武后の天授元年（西暦六九〇）は、我が持統天皇の四年でありますが、この年の九月に大伴部博麻は、新羅の送使金高訓に従って帰還しています。また持統天皇十年四月には、唐国で俘虜生活を送っていた伊予国風速郡の人物部薬、肥後国皮石（合志）郡の人壬生諸石が帰還し、大伴部博麻と同じように、優復を賜っています。捕虜の交換は、媾和条約の第一要件でありますから、日唐媾和条約は、持統天皇四年の前年或いは前々年に締結せられたことが、略確認されます。日本の捕虜の送還に新羅の使が当っていることから推して、日唐両国の和議に仲介の労をとったのは、新羅の国であったろうということが推測されます。

かくして日本からは、和平親善の使節が発遣せられました。『続日本紀』文武天皇大宝元年正月丁酉条には

以民部尚書直大弐粟田朝臣真人。為遣唐執節使。左大弁直広参高橋朝臣笠間為大使。古兵衛率直広肆坂合部宿祢大分為副使。参河守務大肆許勢朝臣祖父為大位。刑部判事進大壱鴨朝臣吉備麻呂為中位。山代国相楽郡令追広肆掃守宿祢阿賀流為小位。進大参錦部連道麻呂為大録。進大肆白猪史阿麻留。无位山於億良為少録。

とありますが、この使節団が難波津を出帆したのは、大宝二年（西紀七〇二）の六月で、帰朝したのは、慶雲元年（西紀七〇四）七月であります。木崎愛吉氏の『大日本金石史』所載の美努連岡万の墓誌銘には

大宝元年歳次辛丑五月。使乎唐国

とあり、『万葉集』巻一には

三野連名闕、入唐時、春日蔵首老作歌

と題して

在根よし　対馬の渡　海なかに　幣取り向けて　早還り来ね（六二）

という歌が見えていますから、大宝元年正月の任命から二年六月の出発までの間に遣唐使の異動があったようでありま

す。『西本願寺本万葉集』のこの歌の所に

国史云、大宝元年正月。遣唐使民部卿粟田真人朝臣己下百六十人。乗二舩五隻一。小商監従七位下中宮小進美奴連岡麻呂。

という書入れがありまして、鹿持雅澄の『万葉集古義』人物伝にも、これが引かれています。木崎氏は、この書入れ文の「国史云」を「類聚国史云」としておりますが、『類聚国史』には此の文は見えません。『扶桑略記』、『帝王編年記』にも見えませんから、この書入れ文の原典はわかりません。従ってこれをどこまで信じてよいか疑問でありますが、使節団が百人を越える大集団であったことは信じてよいと思います。『万葉集』巻一の「山上憶良、在二大唐一時、憶二本郷一作歌」にも

いざ子ども　はやく日本へ　大伴の　御津の浜松　待ち恋ひぬらむ（六三）

とありますが、「子ども」は遣唐使に従える水主、拖取、傭従等を指したものでありましょう。このような大集団の遣唐使が、長安に到ったのは、私のいう日唐戦争第一期冷戦期の終りである斉明天皇五年（西暦六五九）に坂合部石布、津守吉祥、伊吉博徳の一行以来のことでありまして、その間四十三年、長安の人士は、日本使節の入京を見なかったのであります。

平和克復を喜ぶ長安の人士は、久方ぶりの日本使節の入京を喜び迎えたでありましょう。石田幹之助博士は、その名著『長安の春』に我が使節の長安入りの光景を叙して

京城東壁の中門、春明門のあたりに立って見渡すと、西北に方って遠く三省六部の甍を並べた「皇城」が見え、その北には最初の「宮城」（皇宮）が殿閣の頂を見せ、更にその東北には其後の天子の居であった東内諸宮の屋頭が龍宮のやうに浮び、盛唐の頃ならば玄宗が新に営んでその常居となした興慶殿の一角が黄瓦丹墀を映発して勤政殿や花萼楼の画棟朱簾が眉に迫る。西南には朱雀大路に沿うて薦福寺の小雁塔が民家の間に尖った頂を抜き、南の方遙か遠く

には慈恩寺の大雁塔が霞靉たる金霞の底に薄紫の影を包む。このあたりはこの上都長安と東都洛陽、北都太原等とを繋ぐ孔道の都に入って来る処とて、車馬の往来は殊の外にはげしい。地方へ赴任の官吏も出てくれば、駱駝を率ゐたキャラヴァンも出てくる。海東槿域の名産なる鷹を臂に載せて城東の郊野に一日の狩を楽しむ銀鞍白馬の貴公子も来る。唐廷の儀仗に迎へられて、きらびやかな行列に驊騮の歩みも緩く西に向ふのは、大和島根のすめらみことのみこともちて、遙に海を越えた藤原清河などの一行でもあらうか。外国の使臣の入朝するものもその東よりするものはすべてこゝから都へ入つた。

と述べておられますが、粟田真人一行の長安入りも、正にこの通りであったと思います。物見高い長安人士は、堵列してこのきらびやかな日本使節の鹵簿を見まもったでありましょう。右の石田博士の文は、厳密な考証の上に立って書かれたものでありまして、文学者が想像の上で筆を走らせた美文と混同してはいけません。「唐廷の儀仗に迎えられて」の一句は、『日本後紀』延暦廿四年六月乙己条に見える遣唐大使藤原葛野麻呂の奏言に

廿三日。内使趙忠。将二飛龍家細馬廿三匹一迎来。兼持二酒脯一宣慰。駕即入二京城一。於二外宅一安置供給。

とあるに拠ったものであり、「すめらみことのみこともちて」の一句は、『文苑英華』、巻四七一、蕃書四に載せられている「勅日本国王書」に

勅日本国王主明楽御(スメラミコト)徳。彼礼義之国。神霊所レ扶。滄溟往来。未二曾為レ患。云々

とあるを踏えて書かれたものでありまして、一字一句も忽せにはできません。真人の一行は、東内則ち大明宮に導かれ、大明宮の正殿である含元殿で則天武后に謁し、大明宮の西北隅にある麟徳殿で宴を賜わりました。『新唐書』、日本伝には

長安元年。其王文武立。改元曰二大宝一。遣二朝臣真人粟田一貢二方物一。朝臣真人者猶二唐尚書一也。冠二進徳冠一。頂有二華蘤四一。披二紫袍一。帛帯。直人好レ学能属レ文。進止有レ容。武后宴二之麟徳殿一。授二司膳卿一還レ之。

とあります。平岡武夫氏の『長安と洛陽』（京都大学人文科学研究所刊）に拠れば、麟徳殿は親王諸王の婚儀等に用いられる大明宮の奥御殿で、此処に招ぜられる者は唐朝の上客であるということです。故に聖徳太子によって立てられた対中国対等外交の要求が、その儘唐朝に受け容れられたとは言えませんが、唐としては最高の待遇を我が使節に与えたものでありまして、持統朝における媾和条約が戦勝国と戦敗国との間に見られるような不平等なものでなかったことが推察せられます。

これより以後、奈良平安時に派遣せられた遣唐使は、みなこの大宝時の先例によって待遇せられたのでありまして、藤原葛野麻呂も麟徳殿で宴を賜わっていることが、『日本後紀』によって知られます。粟田真人が含元殿で武后に謁したことは、逆に『日本後紀』の記事によって推されます。含元殿は大明宮内の最大の建物で、中共になってから行われた大明宮址の発掘で立派な花文磚が出ました。司膳卿は則ち光禄卿でありまして、正三品の官であります。弘法大師の『遍照発揮性霊集』、巻五に収められている「為二大使一与二福州観察使一書」には

又大唐の日本を遇すること、八狄雲の如く会うて高台に膝歩し、七戒霧のごどく合って魏闕に稽顙すと云ふと雖も、我が国の使には、殊私曲げ成して待つに上客を以てす。面り龍顔に対して自ら鸞綸を承る。佳問栄寵已に望外に過ぎたり。夫の璅璅たる諸蕃と豈同日にして論ずべけんや。

とありますが、それが誇張の言でないことは、王維の「送二秘書晁監（阿倍仲麻呂）還二日本国一詩并序」に

海東国日本為レ大。服二聖人之訓一。正朔本二乎夏時一。衣裳同二乎漢制一。歴レ歳方達。継二旧好於行人一。滔天無涯。貢二方物於天子一。同儀加等。位在二王候之先一。掌次改観。不レ居二蛮夷之邸一。

とあることによって、これを証することができます。唐国における日本人の地位がこのように高いのは、日本が白村江の一戦に敗るるも和を請わず、自ら防備を厳にして三十余間唐と対峙し続けたからでありまして、我々今日の日本人は、当時の日本人の剛毅なる気魄を讃嘆すると共に、自ら顧みて愧ずる所なきを得ません。

日唐戦争（瀧川）

さてこれで白村江の戦より媾和に至るまでの日本と唐との関係の概略を述べ終ったわけでありますが、この日唐戦争第三期に起った大きな出来事は、高勾麗の滅亡と新羅の唐離反とであります。高勾麗の滅亡のことは、前に簡単に述べましたから、爰では新羅の唐離叛のことを補説するに止めます。

新羅が唐から離叛していったきっかけとなったものは、顕慶五年七月（西暦六六〇）、唐と新羅とが腹背より迫って百済の王城泗沘を攻略した時における軍隊の衝突であります。唐将蘇定方は、新羅の金法敏と徳物島に会し、七月十日に両軍の兵が伎伐浦で会することを約しました。法敏は新羅に還り、金庾信、品日、欽純の諸将に五万の精兵を授け、伎伐浦に赴かんとして百済に攻入りましたが、黄山という所で百済の将軍堦伯に喰い止められ、苦戦しました。その為め期に後れて伎伐浦に到ったのでありますが、蘇定方は大いに怒り、新羅の督軍金文穎を軍門に斬ろうとしました。これを見て金庾は激怒し、大将軍が新羅軍が黄山で苦戦をしたことを知らずに、その期に後れたことを責めるのは理不尽である。我々はそのような屈辱を堪え忍ぶことはできない。衆よ、「必ズ先ヅ唐軍ト決戦シテ然ル後ニ百済を破ラン」と叫びました。定方の部将董宝亮は、大いに驚いて兵変ありと叫びましたので、定方は金文穎を釈放しましたが、それ以後金庾信の心は唐から離れて行ったのであります。

蘇定方という男は一介の武人でありまして、泗沘城を陥れて義慈王を擒にした時には、城中で戦勝祝賀の宴を開き、義慈王父子をして唐の将卒に酒を注いで廻らせています。そういう無茶なことをやる男ですから、百済の黒齒常之をして任存城に拠って唐軍に抗せしめたり、新羅の金庾信をして憤激せしめたりしたのでありまして、軍人というものは困ったものであります。今次の大戦に満洲、支那における占領行政がうまく行かなかったのも、帝国軍人が支那人、満洲人をむごく取扱ったからでありまして、満洲国の癌は関東軍将士の横暴を抑えることができないことにありました。戦時中、支那にいた出先官憲が本国政府の不拡大方針にも拘わらず、どんどん戦線を拡大していったのと同じように、朝鮮に駐留した唐の諸将は、百済、高勾麗を取ったら、次は新羅、日本を取ろうとして露骨な計画を立てたのであります。龍朔三年（西

暦六六三）、唐は新羅を鶏林大都督府とし、文武王を鶏林大都督に任じましたが、これは軈て漢人を鶏林大都督に任じ、新羅の地を唐の羈靡州とする準備工作でありまして、唐一辺倒の新羅も爰に至って考えざるを得ぬようになったのであります。

新羅が唐を疑えば、唐も新羅を疑うわけで、両者の溝はだんだん深まってゆきましたが、唐が高勾麗を滅した後に新羅に対してとった処置は特に酷薄で、唐将李世勣は、新羅の平壌攻囲軍の期に後れたのを名として賞賜を与えず、唐の高宗も、また新羅に高勾麗の一城をも与えず、新羅は高勾麗に対する恨みを晴らしたことで満足すべきであると諭しました。この狡兎死して良狗を烹る高宗の酷薄さと、貪婪あくことを知らざる唐人の領土慾とを見て、文武王、金庾信は、唐と袂を分ち、自衛の策を講ずるに至ったのでありまして、新羅が矛を逆まにして唐と戦うに至ったのは、無理もないことだと思います。

新羅はその自衛策として先ず百済の故地を侵しました。高宗は百済を滅したときも、その地を割いて新羅に与えることなく、麟徳二年（西暦六六五）、百済と新羅の堺にある就利山に文武王と百済の扶余隆とを会せしめ、互いにその地を侵すこと無きを盟わしめました。しかし、この時百済は既に亡び、扶余隆は唐の熊津都督として百済の遺民を安撫する為めに熊津に遣わされていたのでありますから、この盟約は、新羅をして唐が占領した百済の地を侵してはならないことを盟わしめたものでありまして、唐の身勝手な盟約であります。およそ両国が同盟して一国を攻めて取った土地を、一国が独占して他の同盟国には寸地尺地も分けてやらないという、そんな同盟があり得るものではありません。故に新羅は、この盟約に背いて唐の鎮岳と戦い、百済の故地を併せました。同盟国としての分け前を唐が呉れないから、新羅は実力に訴えて自分で取ったわけであります。

次に新羅は、咸亨元年（西暦六七〇）、高勾麗王の一族安勝を高勾麗王に冊立して、これを己れの保護下に置き、唐に対抗いたしました。高勾麗が滅亡した天智天皇七年以後に日本に入貢してくる高麗の使は、この新羅によって建てられた

日唐戦争（瀧川）

傀儡政権の便であります。

新羅が、唐と同盟して百済・高勾麗はこれを伐つが、日本はこれを敵としたくないという態度をとって来たことは、前に述べましたが、高勾麗が滅亡してからは、急に日本に対する朝貢の数を増して日本の款心を求め、日本に接近してきました。この形勢を観取したのは、内臣鎌足でありまして、鎌足は、天智七年九月、入貢して来た新羅の使金東厳に付して金唐信に船一隻を贈っています。この鎌足の処置に対して異議を挾む者があったので、鎌足は、普天の下、率土の浜、みな是れ王臣だからと対えたということが、大織冠伝に見えています。この鎌足の打った手は、大いに効果をあげたのでありまして、日唐戦争の第三期、唐との国交が絶えていた時代に、日本は新羅を通じて唐の文物制度を輸入していたのであります。

新羅は唐と戦うたびに謝罪の使を唐に出して、唐の討伐を避けますが、その舌の根の乾かぬうちに、また唐軍を攻撃して地を拡げてゆきます。上元元年（西暦六七四）、高宗は終に疳癪玉を破裂させて、文武王の官爵を削り、劉仁軌に命じて新羅を討たしめましたが、仁軌は七重城を陥れただけで、あっさり凱旋して還ってしまいました。文武王はまた入貢して罪を謝し、官爵を復されました。この頃の唐兵の弱いことは、お話しになりません。新羅兵に攻められては、頑強な抵抗を試みることなく、北へ北へと追われてゆきます。顕慶以後の唐兵は、劉仁軌の奏言にもありましたように、食い詰め者の寄合ですから、弱いのも道理です。唐は高勾麗を滅した時に安東都護府を平壌に置いて、半島全体の占領行政を行う府としたのでありますが、儀鳳元年（西暦六七六）にはそれが保てなくなり、それを新城に後退せしめました。新城は撫順炭坑の近くにある山城で、高勾麗が隋の蜴帝や唐の太宗の軍を防いだ所であります。

翌儀鳳二年、唐は新羅の建てた高勾麗王安勝に対抗せしめる為めに、先に俘虜として長安に連れていった高勾麗王を遼東都督、朝鮮王として遼東に戻し、遼東にいる高勾麗の遺民を安撫させることにしましたが、その政策は失敗に終りました。遼河流域に住んでいた高勾麗の遺民は、漸次唐の討伐の手の届かない吉林の山地に逃れ、英傑大祚栄に率いられて、

震国という独立国を造りました。それが聖武天皇の御代に来朝してきた渤海国であります。故に唐は高宗の末年には殆ど遼東の地を失ってしまったのでありまして、唐が高勾麗の故地を支配したのは、纔かに十年に過ぎなかったのであります。

爰において唐国内に外征のむなしさを呪い、平和を讃美する風潮が澎湃として湧ってくるのは、当然の趨勢でありまして、日唐の和議も、この風潮に押されて成立したものであります。

しかし、日本は和議が成し、親善の使を送っても、なお唐に対する警戒を解きませんでした。奈良時代の日本人には、唐人は隙さえあれば人の国を奪おうとする侵略的、好戦的国民であるという印象が、深く刻み込まれていたからであります。その点、現在の日本人の中国観と正反対であります。日唐の媾和によって撤廃せられたのは、高安城ぐらいのものでありまして、防人の制、烽燧の制は、大宝の親善使節派遣以後も、ゆるむことなく実行せられました。かの『万葉集』、巻廿に収められている防人の歌は、天平勝宝七歳（西暦七五五）二月、防人の交替期に当って、当時兵部少輔でありました大伴宿祢家持が、防人部領使に引率せられて難波津に集ってきた東国の防人が詠んだ歌を蒐集したものであります。我が国が唐国に対する警戒を解いて、東国の勁兵をして対馬、壱岐を成らしめることを罷め、国の守りとしての軍団の兵士を全面的に廃止して、治安警察に当る健児を以てこれに代えるに至りましたのは、唐国が安史の大乱によって衰え、もはや海外に派兵する実力が無くなったことを見定めた桓武天皇の御代のことであります。故に白村江の戦によって受けた日本人の精神的傷痍は、平安時代の初期まで残存していたといってよいのでありまして、日唐戦争が我が国民に与えた影響は実に大きいといわねばなりません。

お話はだいぶ長くなりましたので、まだまだ申し述べたいことはたくさんありますが、この辺で結びの言葉を述べさせていただいて、終りといたしたいと思います。

飛鳥・奈良時代の文化、例えば白鳳、天平の建築、彫刻、絵画、若しくは当代の文学である懐風藻、万葉集といったよ

うなものが、大陸、半島の文化の影響に成ったことは、よく研究せられ、よく知られていることでありますが、当時の日本国家、則ち謂うところの律令国家の基盤をなしている軍事制度が、隋の南北統一によって膨脹し出した隋唐国家の侵略的な武力の圧力によって形成せられたものであることは、殆ど知られていません。日本史家の大化以前の兵制、律令時代の軍事制度を論じた論著は二、三ありますが、それが隋唐の侵略に備えて、日本人がその国土を守るために整備せられたものであることを明確に指摘したものは、殆ど皆無であります。私はこれを大へん遺憾に思っているのでありまして、これから日本史の専家となられる諸君に、それらのことをもっとよく研究していただきたいのであります。私は有識故実という家学を承けて、律令のことを若い時から研究しましたので、世間からは律令の専門家とみられています。私は律令というものは、私のいうかなり長期に亘る日唐戦争の戦われている時代に、太子憲法、近江令、飛鳥浄御原令、大宝令と整備せられていったものでありますから、律令の制度は、軍事制度を軸として実施せられたものであると考えています。例えば戸令に規定せられている戸籍、計帳の制度にいたしましても、国民を国防戦線に立たせる徴兵を第一目的として、その実施をいそがれたものであって、庚午の年籍は、最初から氏姓の紛乱を防ぐために造られたものではないと思います。また公式令に定められている飛駅、駅伝、駅鈴、伝符の制度にいたしましても、交通の便利、物資の流通という経済の発展を目的としたものではなくして、西陲の警報をいち早く京に伝えることを主眼としたものであります。その事は、駅政が兵部省の掌るところと定められていることによって、ハッキリ断言することができます。また医疾令に定められている医療制度は、勿論国民の衛生、福祉の為めに設けられたものではありますが、その軍事目的ということも、重視しなければならないと思います。近代の軍隊に衛生隊があり、軍医総監というものまでが置かれていることを見ましても、医療が軍隊に欠くべからざるものであることがわかります。軍事専門家の間では、医療具、薬品を軍需品としております。養老職員令の衛門府、左右衛士府、左右兵衛府の条に夫々医師一人の定員があることは、注意せらるべきであります。タンクその他をもつ機械化部隊ができるまでは、世界各国に騎兵隊が置かれていましたが、古代社会におきましては、馬匹は軍

事に最も必要なものでありまして、軍事大権のことを「兵馬の権」といったぐらいです。従って馬匹を養成する官牧の制度、それを定めた厩牧令の条文は、律令としては大切なものでありますが、厩牧令の研究は、現在殆ど閑却されています。

大化の改新は、日唐戦争が冷戦期から将に熱戦期に移らんとする際に断行された改革でありますから、軍事制度の改革、整備に最も力が注がれたと思います。孝徳紀、大化二年正月条の改新の詔に

置二畿内国司郡司。関塞。斥候。防人。駅馬。伝馬一及造二鈴契一。

とあり、大化元年八月朔庚子条の東国の国司に対する詔に

於二閑曠之所一。起二造兵庫一。収二聚国郡刀甲弓矢一。辺国近与二蝦夷一接レ境処者。可下尽数二集其兵一。而猶仮中授本主上。

とあることは、改新が軍事を先とした証拠であります。

私が斯う言えば、大化改新の詔は、『日本書紀』の編者が大宝令の条文によって文を為したものであるから、そんなものは証とするに足りないと、さかしらを言う人があるかも知れませんが、大化改新に当って律令の大綱が宣示せられたことは、東亜の大勢から考えて間違いのないことでありまして、その文章を云為して、その事実を疑うごときは、木を数えて林を失うものであります。史家は文章はどこからでも借りて来ます。天武紀、元年壬申条の瀬田合戦の状況を述べた

旗旟蔽レ野。埃塵連レ天。鉦鼓之声聞二数十里一。列弩乱発。矢下如レ雨。

という文は、谷川士清がいしくも指摘しているように、『後漢書』光武本紀に見える昆陽の戦を叙した文章から取ったものでありますが、壬申の年の七月十三日、瀬田に於て激戦が行われたことは否定できません。そういう文章の穿鑿は、閑人の閑事業でありまして、大化の時に設けられた郡の大少領は評督、助督と書いたといったようなことは、それが明らかにされたとて、大した手柄になるものでもないと思いますが、それが鬼の首でも取ったかのように喧しく叫ばれるのは、耳ざわりなことであります。

また世の「万葉学者」なるものが、防人の別離の悲哀のみを強調して、勇躍して国防の大任に当らんとして詠んだ「醜の御楯」の歌を軽侮し、隋唐の虎狼の如き侵略心を咎めずして、国司が兵士を防人に駆り立てることを無慈悲な行為として非難するごときは、ソ聯、中共が原子兵器をもつのは当然で、日本が原子兵器を持とうというのは飛んでもないことだというのと同じことでありまして、正に亡国的見解であると思います。私はこのような太平の逸民が、文化人としてのさばっている現在の社会をいまいましく思うのであります。

老人の愚痴は、まずこれほどにいたしておきまして、私はみなさんが、東大・京大の史学の伝統に囚われて、様によって胡蘆を描くことを為さずに、新機軸を出され、皇学館史学ともいうべき新しい日本史学を樹立せられることを冀求いたしまして、壇を降ることといたします。

編輯部付記・本稿は、昭和四十六年六月四日に行はれた、皇学館大学史学会における瀧川博士の御講演原稿であります。